幼なじみが関羽さん 2

つくね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幼なじみが関羽さん　２

【Ｎコード】
Ｎ８２１０Ｍ

【作者名】
つくね

【あらすじ】
真・恋姫†無双の世界に転生した主人公、だが！幼なじみに関羽がいたりする　　主人公
「俺の右手が真っ赤に燃える！」
関羽「・・・・お前を黙らせろと轟き叫ぶ」
主人公「！！？・・・・
まさかホントにしないよってギァァァァァァァ！！」
※曹操が編です

まことに申し訳ございません！！（前書き）

『幼なじみが関羽さん』をお気に入りにしてくださっているかた、まことに申し訳ございません！

まことに申し訳ございません！！

どうも、愛紗ＬＯＶＩあらため、つくねです。

何故か愛紗ＬＯＶＩでのパスワードを入力してもログイン出来なくなり新しく『つくね』と言うユーザー名で新しく登録させていただきます

そして『幼なじみが関羽さん』の続きを『幼なじみが関羽さん　２』として書きます、『幼なじみが関羽さん』をお気に入りにしていてくださって居る皆様には大変ご迷惑をおかけしてしまい大変申し訳ございません！

とにかく、これからこの『つくね』にどんな困難だかろうとも『幼なじみが関羽さん』を完結させるのでどうか応援してくださるとうれしいです

まことに申し訳ございません！！（後書き）

次の話から『幼なじみが関羽さん』の２７話めです

27話　スイーツ（泣）（前書き）

名前は無くして見ました

あった方がいいと言う人は言ってください

27話　スイーツ（泣）

前回のあらすじ

空が華雄に「ヒンヌーーーーーー！！」っと叫び華雄は激怒し水関を飛び出した・・・・ワロスｗｗｗｗ

「・・・・・空？次に胸の事で私を出して来たら・・・・・わかるよな？」

愛紗が青龍偃月刀を俺に向けながら言ってきた

「・・・・はい、以後気をつけマッスルｗｗｗｗ」

俺は愛紗に見せるように腕の力こぶをだした

「いっぺん・・・・死んでみ「ごめんなさい！ホントに！」わかればいい」

その台詞を聞いたら地獄に行くしかないもん

「それより空、お前の好きなヒンヌーが突っ込んで来たぞ」

ん？あっホントだ！胸を押さえながら走ってきた

「フヒヒｗｗｗどうせ押さえても何もないんだから押さえなくていいのにｗｗｗｗ」

「・・・・空、華雄は任せたぞ」

ん？愛紗が俺に譲るなんて

「どったの？急に、普段ならありえないのに」

「別に、ただ信じてるだけだ」

ん～・・・・・・

「恥ずい事言うなよ」

「・・・・誰が1番恥ずかしいと思ってるんだ／／・・・ほら、行ってこい」

愛紗に軽く背中を押された

「（・・・・・甘いよ～何だよ、今までこんな事なかったのにさ～。なんだ？デレ期かこの野郎☆）んじゃ、行ってきます！」

「貴様ぁぁぁぁぁ！よくも私を侮辱してくれたな！！」

今だに胸押さえてるし

「侮辱じゃない！真実&ごちそうさまでした！！ヒンヌーサイコー、

そして巨乳はもっと好き！」
華雄に向けてグッジョブ☆
「潰す！絶対に！」
そして華雄は斧を薙ぎ払った
「なんの！」
俺はしゃがんで避けた
「当たれ！！」
「お前は春蘭か！・・・・・・いや、悩筋と言う意味では同じか」
よ～く考えて見たら華雄って春蘭が酷くなったみたいな人だね
「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！！」
華雄が斧のラッシュをしてきた斧でラッシュとは、お主なかなかやるな！だがそう言われたら
「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無って無理！待って！ちょｗｗ今カスッた頬っぺた！」
最初は久々の合体剣で防いでたけど無理、途中で防げなくなった・・・・・頬っぺた痛い

―――Ｓｉｄｅ一刀

「・・・・・空ホントに大丈夫？さっきから挑発しかしてないけど」

少し疑問に思った

「大丈夫ですご主人様、空は私と同じくらい強いのです。負ける訳がない」

そうだよな、空ってなんやかんや言って強いか・・・・・・・・・・

「・・・・愛紗、今空頬っぺたに傷つけられてたよ」

「・・・・・心配ありま・・・・・せん？」

・・・・心配だなぁ～☆

―――Ｓｉｄｅ空

「はぁ、はぁ、はぁ、・・・・・華雄さん、マジで待って。実はこの武器で実戦に出るの初めてなもので」

作ったはいい物の使った事なかったんだった・・・・・多いよ、武

器の数

「知るか！私はお前の首を取るまでやる！」

つくそう！分からず屋！・・・・・だが俺にヴィジョンアイがあるのだよ！フヒヒｗｗｗ

「華雄！掛かって来んかいワレ！」

「あぁ！行ってやるとも！」

ホントに突っ込んで来たｗｗｗｗそこですかさずヴィジョンアイ！

「発動ぉぉぉぉ！！」

説明しよう！
ヴィジョンアイとは未来を数秒見る事が出来る能力なのだ！

「（・・・もしもヴィジョンアイが３０分くらい先を見る事ができたら女子が来る３０分前に女子更衣室に侵入してヴィジョンアイを発動させれば・・・・フヒヒヒヒｗｗｗｗｗ）」

ヤバイ！テンション上がって来たぁぁぁぁぁ！あっでも見れないじゃん・・・・・

「テリャァァァァ！」

華雄が斧をおおきく振り上げた

「・・・・ヴィジョンアイ使うまでもなかったか」

ヴィジョンアイで見たら斧を振り上げて下ろしてくるって見えたけど

「華雄３Ｍくらいの場所から振り上げてんだもん、次の行動が馬鹿でもわかるよ」

ホントに馬鹿何だなぁ～っと思いました

「ハァァァァ！！」

斧を下ろそうとしたから先に動いて華雄の後ろに回った

「なっ！なんで動きがバレた！」

「誰でもわかるはボケ」

とりあえず華雄首に手刀

「うっ！」

っと言って気絶した

「・・・・・ホントに馬鹿な人だったな・・・・・・・敵将華雄！討ち取ったり！！！」

その後は簡単に水関は落ちた

――――自軍天幕

「モモ、もうちょっと優しく」

「はい・・・・こっこう、かな？」

「そうそう」

はい、今体中に華雄に受けたかすり傷にオロナイン的な物を塗ってもらってます

エロスな事を想像した人ごめんねｗｗｗまだ童貞だよｗｗｗｗ・・・・・・虚しい

「空さん、華琳さんが呼んでますよ」

プレセアいつから居た

「てか華琳が？・・・・・・なんでだろ？」

とりあえずいっきま～す☆

「かっ華琳さん・・・・・なかなかに熱い歓迎じゃないですか」

「あら、そう？まだ少し甘いと思うけど」

華琳の所に行くやいなや華琳の武器の絶を振りかざしてきたから白刃取りで受け止めてます

ピゥ～

「あっあの？華琳さん、額に少し絶が当たって血が噴水みたいに・・・ピゥ～って」

「そう、でも私噴水は派手なのが好きなの・・・・・もっと大きな」

また絶に力が込められただと！！

「待って！ホントに待って！えぇ～っと、そうだ！理由！理由を！」

とにかくこの状況をなんとかせねば！

「貴方、華雄に・・・ヒ・・・・ヒンヌーって言ってたはよね？」

絶を離して下さい！しかま前より力が！

「そっそれが、何か？」

腕がプルプルしてきた

「・・・・言った後に・・・・・・私を一瞬見たでしょ・・」

誰か腕のプルプルを止めてください！

「少し・・・・見えただけです・・・・だから離すて」

「・・・・本音は？」

「華琳！仲間だよ！って思いました」

あぁ、正直な自分が嫌だ

「　　し　　ね　　」

いやぁ～！！

――――３０分後

「痛いよぉ～額が痛いよぉ～」

華琳の馬鹿！

「フン！」

そっぽ向いちゃって

「・・・・・・・・・そだ、華琳。ちょっといいかな？」

「なっ何よ？」

「ちょっと真面目な話」

――――自軍

「ただいま～」

帰って来ました！やっぱりいいね自軍は

「あっそっ空さん・・・お帰りなさい、遅かったですね」

ありがとう、雛リン。君だけだよ俺を心配してくれてるのは

「皆は？」

「寝てます・・ふぁ～・・私も寝ます」

・・・・雛リンもトテトテと自分の天幕に入って行った

「・・・・・スイーツ（泣）」

27話　スイーツ（泣）（後書き）

短かかったかな？

あと読みにくくなかったですか？

２８話　呂布ＶＳ空（前書き）

幼なじみが関羽さん　のＵＲ何とかです

ｈｔｔｐ：／／ｎｋ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ２６８２ｍ／

28話　呂布VS空

どうも、“水関の将を倒した空です！”・・・・・倒したのにあんまり皆に褒められない

「グスッ・・・・・」

隅っこでいじけてます

「ご主人様～なぁにしてるの～」

「ん？いや、朱里に武器の数数えてって言われたから」

なんだろ、少し離れた所で一刀と桃香が喋ってる

「ふ～ん・・・・えい！」

桃香が一刀に後ろから抱き着いた

「ちょ！桃香、こんな所で」

「大丈夫だよ、誰も居ないし。もしかしてご主人様は私とこんな事したくない？」

「そ、そんな事ないよ」

そう言って後ろから抱き着いてる桃香にキスしようとしてたので

「天誅！！！」

おもいっきり顔を殴ってやりました☆

「いったぁ！何すんだよ！空！」

「何すんだよじゃないんだよ！！人が淋しく一人で落ち込んでるのに近くでイチャイチャイチャイチャ！嫌がらせにもほどがあんだろ！！死ねよ！女と彼女の居ない男の敵が！」

「うっ、まぁごめんって」

ニヤケながら言ってんじゃないよ！！

「お前なんか男の兵の皆さんに後ろの穴掘られて痔になっちまえ！！」

俺はそこを飛び出した

「・・・・・どうした？そんな塩をかけられたナメクジみたいになって」

「別になってないよ、ただ・・・・・水関の将を倒したのに皆冷たいなって」

星まで俺を、皆ヒドイよ・・・・頑張ったのに・・・かすり傷めっちゃついたのに

「愛紗が居るじゃないか」

はい、確かに愛紗には会いました

――――回想

「愛紗！俺頑張ったよ！褒めて～」

「よしよし、あっ鈴々！かってにいじるなと」

――――回想終了

「あれで終わりなんだもん！俺が将を倒したのは鈴々が何かをやらかした事より軽い事なのか！？」

「あぁ～・・・まだプレセアやモモが居るだろ？」

――――回想

「プレセア！モモ！将倒したんだぜ！凄いだろ！褒めてもいいんだぞ！」

「あぁ～そこはそうやって縫えばいいんですか」

「うん、あっでもそっちはそのままでいいと思うよ」

二人が久しぶりのミッ〇ーとキ〇ィーを作ってます

「そうですか、あっ空さんおめでとうございます」

「おめ、でさ」

――――回想終了

「なんだよ！俺は自分で作ったミッキ〇や〇ティーに負けたの！？しかも最後のモモの言葉何？『おめ、でさ』って何？少し聞き間違えたら『おめでた』って聞こえるよ！？俺は子供を身篭ってません！残念でした！！」

「・・・・うん、わかった。わかったからそれ以上泣くな」

・・・・よく見たら目から涙が

「・・・・ヒック、星～・・・・」

星に抱き着いた

「なっ／／／もっもう少しまえもってから抱き着いてくれ、ビックリするであろう？」

少し動揺してる

「だって～皆冷たいんだもん、せめて人肌を」

ちょっと強く抱きしめてみた

「ん／／ちょっとホントに待って／／／」

・・・・・・

「（ヤバイ楽しいＯ（≧∇≦）ｏ）・・・・星」

また少し強く

「あんっ／／／」

「（フヒヒｗｗｗよし、もう一回やって）「空？何をしている？」・・・・・使徒襲来ならぬ愛紗襲来！」

「な　に　を　しているのか聞いている」

鬼の形相の愛紗が！・・・・・ん？

「何で肉まん持ってるの？」

ちなみにまだ抱き着いてます

「・・・さっきはさすがに悪いなと思って一緒に肉まんを食べようと思って・・・・・・・・もういい！」

どこかに行っちゃった

「お主が悪い・・・・私をいじめるからだ」

「・・・・・・・・・・・えい☆」

強く抱きしめた

「ん／／／あっ／／／／」

――――次の日

「あっ愛紗さ～ん」

「・・・・・・・・・」

反応がないただ俺を無視しているだけのようだ

「空さん、そろそろ行きますよ」

「あ～・・・・うん」

元気が出ないよぉ～

「・・・・・・空」

「ん？何？」

「頑張ってこい・・・・私も行くが」

あっ愛紗しゃん

「あぁ！頑張って行ってきま！！」

元気１００％！！

――――虎牢関

フフッフ

「城を捨てて戦うなど具の骨頂、すぐに潰してくれよう」

愛紗のツンとデレをゲットした俺に不可能はないのだよ！

「空さん、あくまでも団体行動をしてくださいね？単独行動は絶対にしないでくださいね？」

プレセアさんよ、俺はもう１８歳だよ？そんな小学生が言われるような事言われなくてもわかってるって

「・・・・・うぉ～！！待ってろよ！張遼！ボッコボッコにしてやんよ☆」

ごめんなさい！そんなフリをされたら芸人魂に火が付いてしまった

じゃないか

「あぁ～何て損な生活なんだろ！？でも足が止まんない！！」

ホントに張遼が居るであろう場所に向かってしまった

「・・・・・・・来る」

「いやぁぁぁぁぁ！！行かないで！いや、マジで！フリとかそう言うのじゃなくて！」

あぁ～マジで来ちゃったよ・・・・・・マジでどうしよ「ブン！！」

うおっ！

「なっ！誰だ！」

ブッ←空の屁の音

「ホントに誰だ！」

「・・・・・・・・それはお前」

林の奥から誰かが

「いや、なんだか緊張したら出ちゃって」

「・・・・・・お前・・・・・敵？」

なんだろ、この喋り方

「・・・・・そう・・・俺・・・お前・・・・敵」

とりあえず相手に合わせてみる事に

「・・・・・・・なら・・倒す」

そう言って相手が武器を構えた

「・・・・・ん？その武器・・・・あっ！お前呂布か！？」

いつぞやのあの子ではないか

「・・・・・？・・何で恋の名前知ってる？」

「覚えてない？ほら一緒にご飯食べたじゃん」

しかし呂布は思い出せないみたいで

「・・・・・ごめん・・・・覚えてない」

つくそう！一緒に食べたのに

「まぁ、一回しか会った事ないからね・・・・・で！呂布はやっぱり敵なの？」

そう聞くとコクッっと頷いた

「（・・・・正直勝てる気がしない・・・・刺し違えるくらいの事したら何とかなるかな？）・・・じゃ、やる？」

「・・・・・・コクッ」

そしてまた武器を構えた

「Ｌｅｔ's　ｐａｒｔｙ（レッツパーリー）！、って一回言ってみたかったんだよねｗｗｗ」

先に動いた、

俺はファースト剣と先に動いた、

俺はファースト剣とアポカリプスを背中の剣ホルダー？まぁクラウドが剣さしてるあれです、わかんない人はアドベントチルドレン見てね☆

とりあえず二本の剣でラッシュしてみた

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！」

別に華雄がやってるの見てやりたくなったわけじゃないからかね！

でも

「・・・・・・・・・・無駄」

全部防がれてます、あと呂布ちゃん！そこは連呼してよ！

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ラッシュきつい」

やっべ、マジで体力持ってかれた。しかも呂布ノーダメ

「・・・・次は恋・・・行く」

そう言って突っ込んできそうなので

「ハァ、ヴィジョンアイ・・」

で呂布の未来の動きを数秒見た

「！！？・・・・・・何で？」

合計１０回くらいの斬撃を自分より格下の相手が完璧に避けたんだから不思議だぁ～

「ハァ、ハァ、別に、ただ避けるのは呂布ちゃんより上手いだけじゃない？」

つかヴィジョンアイ使うとやっぱりかなり体力食われるな・・・・

さっきから喘ぎ声・・・・じゃなくて息があらくなる

「・・・・・そんなのじゃない・・・・・恋の動きわかってた」

さすが三国一の武将だね

「別に、ただ体力と引き換えに未来がちょこっと見れるだけだよ、まだ皆に言ってないんだから黙っててね」

お口にチャックね？

「・・・・・わかった・・・・でもお前は此処で死ぬ」

いい子だ、でもおじいさん殺すのは良くないとおもうな！

「ハァ、ハァ、待って、もう俺のＨＰは０だよ」

マジで疲れた

「・・・・・・行く」

来た

「ヴィジョンアイ」

これの繰り返しになりそうだな・・・

「・・・・・・・・・・」

ツクソウ、無言のラッシュとは。小説なめんなよ

「チッ！・・・なっ！危な！・・・」

確かにヴィジョンアイで未来見て動けば当たらないけどその動くのにも体力使うから二重に疲れるネ！

「・・・・・・・・ハァ」

やっと終わったけど呂布ちゃんあんまり疲れてナッシングね

とうの俺は

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ・・・・あぁ～・・・・痛て」

横腹思いっきり切られますたｗｗｗ・・・・マジで痛い

「・・・・・もう降参しろ・・・お前次当たったら・・・死ぬ」

「ハァ、ハァ、やだ！だってこのまま負けたら俺弱いみたいじゃん、そんなの認めません！」

せっかく合体剣作ったのに負けるとか・・・・・やだ！

「！！！？、空！！大丈夫か！」

愛紗が来たんだ

「だっ大丈夫、うん、大丈夫だから」

「いや、大丈夫ではなかろう？血がドハドハと出ておるぞ？」

星も来てたんだ

「そうなのだ！はやく空はさがってるのだ！」

・・・・・・・・・・・・

「なんだろ、鈴々とは久しぶりに話すような」

なんでだろ？

「そんな事どうでもいい！空、早く連合軍の居る場所に行け！早く治療を」

うわ、愛紗泣きそｗｗｗｗ

「・・・・・でも、・・・・・やだ！だってまだ俺活躍しないし！・・・・・まだ合体剣二つしか使ってな「トン！」フハ！・・・・」

星の手刀で気絶させられた

「

・・・・・・・・・・

「なんだろ、鈴々とは久しぶりに話すような」

なんでだろ？

「そんな事どうでもいい！空、早く連合軍の居る場所に行け！早く治療を」

うわ、愛紗泣きそｗｗｗｗ

「・・・・・・でも、・・・・・やだ！だってまだ俺活躍しないし！・・・

・・まだ合体剣二つしか使ってな「トン！」フハ！・・・・」

星の手刀で気絶させられた

「・・・愛紗、空を早く持っていけ」

「あぁ！」

そう言って空を担ぎながら連合軍に向かった

２８話　呂布ＶＳ空（後書き）

フヒヒｗｗｗ空ボロボロｗｗｗｗｗｗｗ

２９話　横腹を怪我しました（前書き）

難産でした

29話　横腹を怪我しました

――――Ｓｉｄｅ　空

「・・・・・・・・・」

「・・・頼むから無茶はしないでくれ」

はい、呂布にボロボロにされた空です。そして愛紗に説教されてます

「・・・・ハァ～・・・・・・」

正直すっごいショックです、今までチートだと思ってたのに・・・・・やっぱりあれかな？友情、努力、勝利がないと勝てないのかな？

「空さん！愛紗さん！虎牢関が落ちました！」

ありがとうモモ、でも今は一人にさせて

「・・・・・モモ、愛紗、今は一人にさすて」

「うっうん、愛紗さん行こ」

モモが愛紗に尋ねた

「・・・・・・・・・」

はい、動こうとしません。つか俺をガン見

「じゃ、私行くから」

モモ離脱！

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

気まずい、てか何で愛紗は俺をずっと見てんの？・・・・ヤンデレみたいだよ？

「空・・・・ホントに無茶な事はしないでくれ・・・・」

さっきも聞きました

「おｋｗｗｗまず基本俺は無茶しないけどねｗｗｗ」

「・・・・・そうか」

「（・・・・・駄目だ、愛紗と俺の温度差が激しい）・・・心配しなくても死なないって、基本ギャグ何だからｗｗ」

「・・・・・そうか」

もうやだ（泣）

「あの、とりあえず寝るから」

まだ少し痛いし

「・・・・・・そうか」

そう言って俺が寝ているベットに入ってきた

「!!?・・・愛紗さん?」

「・・・・突っ込んでくれ」

そしてベットから出て行って部屋からも出て行った

「・・・わからないよぉ～（泣）・・・もう・・・・・・え?・・・・何?・・・愛紗は何がしたいの?」

愛紗がわからなくなりました

――――――　三日後

何故か三日間寝てたらしい

「で、何で俺の知らない間にメイドさんがしかも二人も居るのかな?」

はい、起きたら一刀の作ったメイド服を着た二人の女の子がいました

「いや～えぇ～・・・・・昨日からメイドになった月と詠です！」

いや

「董卓と賈躯だろ」

まぁ原作知ってますから

「え？何？違うって、この子達は月と詠って言ってただの女の子だよ」

一刀、汗めっちゃ出てる

「そっそうよ！だから何！？」

賈躯に逆ギレされました

「いや、別に何でもないです・・・・・」

ごめんなさい、打たれ弱いんです

「その、さ・・・・黙っててくれないかな？月や詠の事がばれたら二人とも殺されちゃうからさ」

そんな必死に言わなくても大丈夫だって

「別に言うつもりないから心配するな」

そう言うとメイド二人は安心したって言う顔をした

「それより愛紗は？俺が寝てから見てないんだけど、つか寝てたから見れないのは当たり前だけど」

何言ってんだ俺？

「あぁ、確か天幕で寝てるんじゃないかな？」

ふぅ～ん・・・・珍しい

――――　愛紗の天幕

「失礼しまぁ～・・・す・・・・・・・愛紗大丈夫？」

布団に包まってます

「どうした？お腹痛いの？」

・・・・ごめん、愛紗。気の利いた事言えなくて

「・・・・怖いんだ・・・・・」

何が？

「・・・私のせいでお前は村を追い出されただろ？私の感ではお前

はあの事件がなければあの村にずっと居たと思うんだ・・・・そして村に居たらこんな傷をおう事もなかった・・・絶対に村でお前は生涯を過ごそうとしていたはずだ」

さすが幼なじみ！何でもわかってる！

「でも少しだけ違うよぉ～」

愛紗が目線だけこっちを向けた

「愛紗が此処に居るから居るの、愛紗が本気で世界変えたいと思ってるから俺も本気でその願いを叶えようと思ってんの」

・・・・今の俺カッコよかったんじゃね？いや、マジで

「あれだよ、単に好きな人の側に居たくて好きな人がこれをやりたいって思ってるなら叶えてあげたいの」

愛紗の中と俺の中の俺株が上昇中ですｗｗ多分！

「・・・・・・・・・・・・」

・・・・あれ？無言？・・・・・・なっ何かリアクションないの？今の俺すっごいカッコよかったと思うけど？

「・・・・・・・すぅ～・・・・・すぅ～・・・・」

あぁ～・・・・

「オチがわからなかった訳ね？」

作者の馬鹿野郎！！！

――― 皆が居る所

「・・・・・・・・」

「空さん、どうしたんですか？」

プレセア、聞いてくれるのか？

「・・・・愛紗、無言、寝てる、乳揺れてる、・・・・おいしそう」

おっと、最後欲望がはみ出てしまった

「・・・・いつもどうりですね、それよりご飯たべましょう」

慣れてんなぁ～、俺の扱いに

「うん」

愛紗の胸ばっか見てたからお腹空いちゃった☆

――― 夕飯

「うましｗｗｗ」

――― 夕飯終了

「あぁ～・・・食った食った、って愛紗」

外に出てみると布団に包まったままの愛紗が立っていた・・・・・・

つか怖いよ、もう夜だから・・・・なん・・・あれだ・・・・・怖いよ

「・・・・すまなかった・・・・・・寝ちゃって」

そう言いながら近づいて来た

「ヒッ！・・・・・わかった！わかったから今の距離を保とう、今の距離を！」

だって・・・・怖いよ、なんだか・・・・怖いよ

「・・・・そうだよな、こんな女が側に来られたら嫌だよな」

そう言って後ろに下がって行こうとしていた

「待って！行かんといて！行ったらあかん！そう！布団を一旦下ろそうか」

いや、貴方の布団が怖い訳で貴方が嫌な訳じゃないんだよ

「うん・・・・・・・・・」

布団を下ろした途端に話さなくなった

「（・・・いつから愛紗の本体が布団に？）・・・・ご飯たべよ？」

「・・・・・・コクッ・・・・」

・・・・めんどくさい子だなぁ～

――― 夕飯

「・・・・・うましｗｗ／／／／」

「（恥ずかしいならやらなくていいのに）」

――― 夕飯終了

その後愛紗を何とかなだめて今は一刀の天幕に居ます

「・・・・・・・・・・・・」

「疲れてんな、空」

さすがに疲れるって横腹切られて寝て愛紗なだめて・・・・はぁ～

「一刀、何だよあの粗末なメイド服は。俺お前にはガッカリしちゃ

ったな」

縫い目とかホントに雑！

「・・・フフフフフハハハハヒハハ！！」

一刀が壊れた！？

「なっなんなんだよ！？」

「いや、縫い目が荒いのはな？わざとなんだよ」

あぁ？

「おい一刀？例え急にメイド服が必要になったからって粗末な物を渡しちゃいけねぇ、それが男のいや。性少年の心ってもんだろ？」

「フっわかってないな」

今のはプチッっときたぞ

「じゃあ何か？粗末な物を出していいと？」

「話はちゃんと最後まで聞くもんだぞ？実はあのメイド服には仕掛けがある」

しっ仕掛けだと！？

「実はあのメイド服・・・・・・脱げるんだよ」

「！！！？・・・・・どうやれば」

「メイド服の横の所に糸があってそれを引っ張ると・・・・・フヒヒ」

「何処のエロ漫画だｗｗしかし・・・・・フヒヒｗｗｗｗ」

――――　一刀天幕外

「・・・・・・・・」

「・・・・・詠ちゃん、ホントに糸あるよ」

２９話　横腹を怪我しました（後書き）

次回予告

空「はい！どうもぉ～、次回予告担当の空です！」

プレ「・・・・プレセアです」

空「えぇ～何でいきなり次回予告的な物ができたかと言うと、単に作者が友達に「次回予告とかＹＯＵ作っちゃいなＹＵ☆」っと言われたからなのです！（友達の台詞には一部フェイクションが入ってます）」

プレ「・・・・それでは次回予告です、桃香さんが徐州の太守に任命されました」

空「そんな訳でお引越し！でもそんな簡単に俺達の引越しが終わる訳がない！」

プレ「と言う訳で次回『引越し』をお楽しみに」

空「バイバイ！・・・・・・・・・プレセア、はい。バイト代」

プレ「・・・・・確かに」

一刀「バイトなんだ」

３０話　雛見沢症候群（前書き）

更新が遅くなりすみません！

３０話　雛見沢症候群

桃香が徐州の太守に任命されたので

「お引越しで～す！」

桃香がそう言って皆がワァ～っとなるが

「「（やっべ～！！）」」

はい、またまたピーンチです！

実は俺の部屋って改造とか改造とか改造とかしてマジ・・・あれだ・・・ヤバイ

「一刀さん、一刀さん、マジでどうします？」

「空さん、空さん、マジでどうしたらいいのかわからない」

ん～もしこの城をほかの誰かが使って俺の部屋を使ってみろ・・・・・・死ぬなそいつ

「・・・ぶっ壊すしかないな・・・でも・・・壊すって言ってもいろいろ有りすぎて壊せないな」

メイド服とかネコミミとかスク水とか大胆な下着とかナース服とかバニーとか」

「そんなにあるの？」

「なっ！読心術！「途中から声に出てた」さいですか」

しかしどうしようかなぁ～

「地道にやってくか」

とりあえず頑張っ行くか

――――　自室

「なら始めましょう！」

「おぉ～！」

二人っきりの大掃除の始まりです

「確かドアから右から四つ目のタイルだったよな？」

はい！自室に地下作っちゃいました☆

――――　地下

ボウッ

ちなみに上の音はロウソクに火をつけた音だよ

「・・・・いつ以来だ？地下に来るの？」

「・・・・・・・・・あっ！俺か」

「ほかに誰が居るんだよ」

いや、だってホントにこの地下に来るの久しぶりだからさ、感傷に浸っちゃって

「お！着いたぞ」

一番下に着いたみたいだ

「一刀は左側のロウソク付けて」

この地下室の大きさは一軒家のリビングくらいある

「全部付けたぞ・・・・・・しかし此処にある物の殆どは使わなかったよな」

はい、この地下室にはメイド服などその他もろもろだけでなく

「そうだな、一刀・・・・・・・おい一刀！見てみろよこれ、懐か

しいな」

「ん？あぁ～それって此処作って初めて作ったやつじゃん」

そうです！地下室、メイド服、コスプレ衣装、もう卑猥な事しか頭に思い付かない人は俺達の仲間だ！

「「この手錠、ホントに懐かしいな」」

はい、そうです！此処には三角木馬から始まり、鞭、ロウソク、華蝶マスク、などなどのＳでＭな人達が喜ぶようなグッズが盛り沢山なのです！

「・・・・一回くらい使ってやりたかったな」

「うん・・・・・・・最後だから言うけどさ。」

いつになく真剣な眼差し

「おやしろ様とかに祟られないかな？雛見沢症候群とかないかな？かな？」

「むしろ俺が掛かってるんじゃないのか心配になったよ」

タブル『かな？』はこの部屋ではタブーだよガチで、だってこの部屋ホントにおやしろ様みたいなの飾ってるし

「・・・・・とにかく、必要な物だけ持って行こ」

とりあえずスク水とメイド服とナース服と「空、何だこの部屋は？」

ギャァァァァス！

「愛紗さん、何故この部屋に？」

てか愛紗だけじゃなくて皆居る

「いや、ご主人様と空の姿が見えなかったから探していたら・・・・・・まさかこんな場所があるとは」

ヤバイ、皆が手錠とか亀甲縛りようのロープとか三角とか見てる

「はわわ、雛里ちゃん！雛里ちゃん！これなににつかうんだろ？／／／／」

朱里ちゃんそれ触っちゃダメ！それバイ○！

「ととっとにかく！俺達の居る場所はわかったんだから、ね！？」

ヤバイって！愛紗とか星とか桃香ならまだしも、雛リンとかプレセアとかちっこい者組が触ったりしたら

・・・・・興奮しちゃうじゃないか！！

「空さん、さすがにこの部屋を二人だけで片付けるのは大変です・・・だから手伝います」

善意痛い！プレセアはいい子なんだよ？でも善意が痛い！

まぁ俺達がどんなに頑張って

「あわわ、朱里ちゃん。これうねうぬしてる」

「プレセア、見てこれ。この上に乗るんだって」

雛リンと朱里はいまだバ〇ブに興味しんしんで、モモとプレセアは三角木馬に興味津々

「これなんて羞恥プレイ？」

自分の性癖を見られるのがこれほどまでに恥ずかしいとは、愛紗達は一歩引いた場所で俺達を見てるし

「早く此処を潰そう、おやしろ様も許してくれるよ」

ソッコーで潰しました

――――――　夜

「はぁ～・・・・・・」

潰したはいいけどメイド服とかスク水とかも全部・・・・・・・・

「・・・頑張って作ったのに　・・「バッン！」・・・何一刀？」

いきなり部屋のドアを開けられたと思ったら一刀が部屋に入ってド

アを閉めた

「ヤバイ！朱里が暴れだした！」

いや、意味わかんないから

「え？何が？」

「だから！朱里が急に中華包丁持って暴れてるんだよ！ひぐらしのレナみたいに！ちなみに決めゼリフは、はわわ？はわわ？」

・・・・おやしろ様関係だから？この城を出ようとしたから？

「はわわ？はわわ？」

「ヤバイ！朱里が来た！空、逃げるぞ！」

マジで～

とりあえず逃げる事に

「で、どうすんの？このまま逃げたとして何処に行くの？」

今は俺の部屋から出てきて玉座に居る

「そうだな、とりあえず俺が見た所では。プレセアとモモと鈴々あと星が・・・・雛見沢症候群に」

うぅっ、っと言いながら俺に見えないように自分の顔を隠した

「（つか雛見沢症候群って）・・・一刀、愛紗と桃香と雛リンは？」

「そうだ！愛紗達は愛紗の部屋に居るんだった！」

――――　愛紗の部屋

「愛紗！まだ生きてる？」

愛紗の部屋に入ったけど三人で布団に包まってた

「大丈夫だ、しかしなんなんだ？朱里は中華包丁を振り回すし鈴々は爪を剥がそうとするし星にいたってはメンマを無理矢理食べさせようとするし」

愛紗よ、星はホントに雛見沢症候群なのか？

「ご主人様！此処から逃げよ！？此処にいたら死んじゃうよ！」

桃香が一刀に抱き着きながら言った・・・うらやましい

「あわわわわわわ！！」

雛リンはホントに雛見沢症候群に感染してないよね？っと思うくらいあわわ連呼してる

「じゃあとりあえず逃げるか」

逃げる事に

「ハァ、ハァ、ハァ、とりあえず何とか逃げ切れたな」

一刀が息があらくなってる、別にそこまで遠くにきた訳じゃないのに。ちなみにここは城から一キロくらい離れた場所です

「・・・・なぁ、あれ朱里達じゃね？」

城の方から中華包丁を持った朱里と人の爪を剥がすそぶりをする鈴々とメンマ壷を持った星と他二人がいた

「クソッ！もう来たか、皆！逃げるぞ！」
一刀の声で皆が立ち上がり走り出した
「ハァ、ハァ、ハァ、あう！」
雛リンがこけた
「雛リン大丈夫「空！行くな！」なんでだよ愛紗！」
「今雛里を助けに行ったらお前まで朱里達に捕まる！」
そう言って愛紗は涙を流しながら走って行った
「・・・・くっ！雛リンごめん！」
俺は雛リンを見捨てた

「・・・・なぁ、一刀」
「ハァ、なんだ空？」
今朱里達がかかってる雛見沢症候群が本物なら
「俺達の中に女王感染者とかいるんじゃね？」

フト思った事を言ったんだけどそれってまずくね？

「・・・・そうだよな、とりあえずそいつを守りながら逃げないと。誰かはにゅうを見ませんでしたか！？」

お前馬鹿だろ？誰かはにゅう見ませんでしたか！？って

「はにゅう？・・・・・・・・そういえば」

愛紗が何か思いだしたみたい

「愛紗なんか思いだした？」

「実はさっき雛里が独り言を言ってる時にそんな単語が出たなぁ～と」

・・・・・・雛リンが女王感染者！！！！

「・・・・ヤバイよもうすぐ俺達も感染する、一刀どうしよ・・・・・一刀？」

一刀が地面にしゃがみ込んでいた・・・・・あら、いやな予感

「あの、一刀さん？」

「・・・・・うぁぁぁぁアアアアア！！！」

急に叫んだと思ったら一刀は自分の首を掻きむしり始めた

「・・・・はい、圭一君の完成です・・・・・・・桃香は？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」桃香がごめんなさいを連呼してる

「頑張れ千回♪・・・・・・・・・愛紗逃げよ」

「・・・・・あぁ・・・・」

とにかく此処に居たら死ぬ♪

「・・・・何処に行こう、まぁ俺は愛紗となら何処でもいいんだけど／／・・・・・愛・・紗？」

あれ？なんだろ？愛紗が急に黙りこんでしまった・・・・・嫌な予感（泣）

「・・・・・・ニコッ」

「たわらば！！・・・・・・あれ？」

はい、どう見ても夢オチでしたｗｗｗ

「・・・・・・ハァ、まぁよかった」

最後に愛紗に笑いながら殺されるとか

「って早く軍議行かなきゃ」

――――――　軍議

「お引越しで～す！」

「（あれ？デジャブ？デジャブなの？）」

３０話　雛見沢症候群（後書き）

空「ハロー！次回予告担当の空なのです！！」

モ「今回は私がプレセアに代わり次回予告担当です」

空「いや～今回の話微妙だったな！」

モ「ひぐらしを知らない人には何がなんなのかわからないもんね」

空「つか今回のモモとプレセアの扱いがｗｗ酷いｗｗｗ」

モ「それは今度作者に・・・・・フフ」

空「（作者になんなんだ！？）まぁとにかく！次回予告です！」

モ「お引越しが完了した私達」

空「だけどいろいろと引越しにお金を使いすぎた！ヤバイどうすよう？」

モ「そこで私達は近くの富豪にお金の投資をしてもらおうと思ったが一筋縄で行かないのがこの小説！」

空「という事で次回！「愛はお金で買えないけど幸せはお金で買えるよね」また読んでね！」

モ「バイバイ！」

３１話　愛はお金で買えないけど幸せはお金で買えるよね（前書き）

次回に続きます

31話　愛はお金で買えないけど幸せはお金で買えるよね

「お引越し完了でぇ～す！」

桃香がそう言うと皆がワァ～っとなる

「一刀さん、俺なんだかこんな光景前に見たきがするのでしが？」

「え？そう？」

雛見沢症候群がなんとかってあったような

「あの、桃香様」

朱里が何だかブルーな表情で桃香に質問してる

「何？朱里ちゃん？」

「実は・・・・・お金がないんです」

・・・・・なんだろ、空気が重い

「そんなにまずいの？雛リン」

わからないので雛リンに聞いてみた

「はい、私達はただてさえ弱小なのにお金がない。つまり兵隊さんの給金をあげられないそしたら兵隊さん達は逃げてしまいます、そしたら他の諸国に攻められてしまいます」

つまり俺オワタって事か

「どないすんの？マジでヤバイんだろ？」

雛リンにまた質問しちゃう、だってわかんないんだもん

「・・・・とりあえず近くの富豪にでも融資してもらうって事にしかならないですよね」

おふっ、なんだかめんどくさくなる予感

「なら、私と桃香様とご主人様と雛里ちゃんと関羽さんと空さんで行きましょうか」

朱里よ、何故俺まで

―――　富豪家

「っと言う訳でどうにか融資していただけないでしょうか？」

朱里が小難しい事を話してる・・・・・馬鹿だから全くわかりませんでしたｗｗｗ

「ん～しかしなぁ～・・・・」

富豪の太った男が渋ってる・・・・つか富豪＝太ったって何だか失礼な先入観だな、作者

「パパ、誰なの？そいつら」

近くのドアが開いたと思ったらそこから黒髪の長い女の人が出てきた・・・・つか偉そうｗｗ

「実はこの人達に融資してくれないかと頼まれてね」

「そんなのしなくていい・・・！！！？・・・・あなた名前は？」

黒髪の女の人がいきなり俺の前に来た・・・・つかなんかわかんないけど怖い

「あっ、俺っスか？郭銀、字は元っス」

なんで俺後輩みたいな喋り方になってんの？

「そっそう、私は魃椎（はっしい）、字は犁（れい）よ・・・・です！」

なんかごつい名前だな

「俺は郭銀、字は元、つか俺達今君のお父さんと話してるんだけど」

正直邪魔？

「そんなのどうでも・・・・そうだ、パパ！この人達に融資してあげてよ！」

何故急に笑顔なんデスカ？・・・・・嫌な予感しかしない

「どっどうしてだい？」

あなたのパパも困ってるよ！？

「貴方達、郭銀を少しの間私に貸しなさい！そしたら融資してあげる」

そう愛紗達に言い放った・・・・・って待てやゴラ！

「何で俺？一刀が居るじゃん、種馬で有名な一刀君だよ？カッコイイじゃん」

一刀から種馬はカッコイイのか？っと言う質問はこの際無視です、何故だ

「だって・・・・・何だか郭銀の方がいいんだもん／／／・・・・あとそっちの彼は何だかやだ」

お前は何だ！？さっきから何だか何だか！お前何か？何だかが口癖なのか？何だか！？

「・・・しかたない、空。頑張ってこい」

！！！！？

「え？あっ愛紗さん？いいいいの？俺少しの間だけど居なくなるんだよ？」

まさか愛紗が一番最初にそんな事言うなんて・・・・・なんか、凄いショックです

「まぁ、しかたないだろ？とにかく頑張ってくれ」

その後は皆もＯＫ出して二週間の間、魃椎の家に居る事になりました・・・・・・・簡単に言うと愛紗達に俺、売られました

――――　Ｓｉｄｅ一刀

「・・・・・・・・」

「どうした？愛紗」

魃椎の家を出てからずっと愛紗が無言のままだ

「いえ、少し空が心配で」

あっ、そうだよな。大事な幼なじみを言い方は悪いけど売ったんだし、心配じゃない訳ないよな

「・・・・・あの家の物を壊したりあの家の人を不機嫌にさして融資の話が無くなったりしないか不安で」

・・・・・空、こっちはお前が居なくても何とかなりそうだぞ！（笑）

「って！ホントに心配じゃないの！？あの女の子、空の事かなり気に入ってるみたいだったけど！」

正直あの子結構可愛いかったし

「大丈夫です、空はあんなのに引っ掛かったりしません。私にメロメロですから」

・・・・・・・・・

「さいですか」

ホントに大丈夫そうです！

――― Ｓｉｄｅ空

「・・・・・・・・・・」

はい、いまだに傷が癒えない空です

「愛紗マジできついよ」

ちなみに今は二週間の間、使っていいと言われた部屋に居ます・・・・・マジで広いです

ガチャ

「郭銀、今なにしてる？」

ノックも無しですか！？これがオ〇ニー最中ならなんて露出プレイ！あっそういえばこの時代にノックってないのか

「別に何もしてないけど？何かよう？」

一応、クライアントなので優しく言った

「いや、一緒にお風呂に入ろうかなって／／／／」

・・・・・・あれ？俺死んだの？此処って天国なの？今までそういったエロスなウキウキがなかった俺に神様がくれたご褒美なの？神様！あんたやっぱりさいこうだ！！

「・・・・・しっしかたないな、誘われたんだから・・・入る・・・・」

ストップ俺！いいのか？多分俺、お風呂に一緒に入ったら理性がとぶと思うんだ！だって俺のパイオツマニアセンサーと下のセンサーが反応しまくってんだよ、つまり！魅椎は隠れ巨乳！・・・・・理性がもつ訳ないじゃないか

「・・・・・ごめん、俺父さんに２０才になるまで知らない女の子とお風呂に入っちゃいけないきまりなんだ」

女心を傷つけないように断るのも一苦労だぜ！（泣）

「そうなんだ、したないか。私達今日知り合ったばっかりだしね」

そう言うとトボトボと部屋を出て行った

「・・・・ダァーッ！！！クッソ！頑張って童貞を守ったんだ！帰ったら愛紗の胸をめちゃくちゃ揉んでやる」

そんな叶うはずのない夢を思いながらその日は寝た

――――――　朝

その日の朝はスパンキングの音で目が覚めました

「・・・・・・珍しい目覚めかただな」

まぁ、新しい家に住むってこんな事なんだなっと思いながらトイレに行く事にした

「何処だろ？トイレ」

かれこれ5分くらい探してるけどスパンキングの音がだんだん大きくなるだけでトイレが見つからない

スパン！

スパンキングの音がする部屋を見つけてしまった

「・・・・入るか・・・・・入るかｗｗ」

入る事に

「すみませ「この豚野郎が！」・・・・」

ドアを少しだけ開けた所でそんな声が聞こえたのでそれ以上開けるのをやめた

「フフフ、貴方？今日から二週間お客様がしかも私の娘が連れてきた男の子が居るのにこんなお仕置きされてて興奮してるの？」

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ」

どうやら昨日話した魃椎のパパとお母さんと思われる二人がＳＭプレイをしているようだ、なかなかに仲睦まじいね！☆

「フフフ、ほら。貴女もやりなさい」

「はい、ママ」

・・・・・・・・まさかの娘（魃椎）登場！！！！

「・・・・・・・・」

俺はついていけなくなりそのドアを閉めた、あとトイレもどうでもよくなった

３１話　愛はお金で買えないけど幸せはお金で買えるよね（後書き）

空「・・・・・・・」

プ「どうも、次回予告担当のプレセアです・・・・・今日の空さんは何だブルーで話す余裕がないのでモモを連れて来ました」

モ「モモです、ホントにどうしたんだろね？」

プ「何でも普通の人が見てい限界を超えたらしです、じゃあ空さんもこんな感じなので次回予告です」

モ「魃椎家に二週間の滞在を命じられた空さん！」

プ「魃椎家の雰囲気に押されっぱなしの空さん、でもただでは転ばないのが空さん！」

モ「次回！「・・・何だかやだ」っです！またね！」

プ「次回もよろしくお願いします」

32話　・・・何だか、やだ

前回のあらすじ

空が魃椎家に二週間の滞在が命じられた、そして空が魃椎家で行われているスパンキング大会?を目の前に着いていけなくなった

「・・・・・・・・・・・」

あれなんだよ・・・・・まぁ、魃椎一人がやってるならまだ想像できるけど・・・・・親子でかよ

ガチャ

「郭銀!起きてる?」

部屋に入ってくるやいなやそんな事を言ってきた

「・・・・起きてるよ」

ブルーだけどね

「何だか顔が青いよ?それより朝ごはん食べましょ?」

・・・・・そうだ、あれは夢だったんだ。こんないい子がスパンキングでしかも実の父親を叩く訳がない

「ならお言葉に甘えて」

朝食を食べに行く事にした

――― 食卓

「やぁ、昨日はよく眠れたかい？」

昨日の魃椎のパパが笑顔で向かえてくれた、やっぱり信じられないよ。だってこの人がさっきまで「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ」してたなんて考えられない！

「はい、久しぶり寝てるって感じがしま・・・・！！？・・・・あの、失礼ですがお尻から血のような物が流れてるのですが？」

信じたくないけどズボンの裾から血が見えてる

「ん？あぁ、気にしないでくれ！・・・・実はスパンキングの後でね」

何で隠さない！あと何で最後耳打ちで話た！今此処には当事者しかいないだろ！！息臭いし！なんか余計にイラっと来た！！

「そうですか（怒）」

「郭銀！早くご飯食べよ？」

・・・・落ち着け、俺落ち着け、此処は余所の家なんだ。

此処で我慢出来なくて愛紗と結婚できると思ってるのか？結婚生活ってのは我慢が必要って昔に見たテレビでやってたんだ、とにかく今は借りてきたネコのようにおとなしく

「あら、貴方が娘が連れてきたっていう子？」

何処からともなく魃椎のママらしき人が現れた

「そうですママ、郭銀、字を元って言うだ」

そうママに報告している

「ふ～ん、郭銀君？貴方痛いのと辛いのどっちが好き」

「どっちもキライです！（笑顔」

・・・・・やっぱりアブノーマルなママでした（泣）

「とにかく食べようか」

魃椎がそう言って皆食事を始めたんだけど・・・

「あむ・・あむ・・あむ」

パパが床に置かれたご飯を手を使わないで食べてる・・・・・はっきり言うと犬食い

「（・・・・・慣れろ、慣れるんだ。たった二週間じゃないか！・・・・・・・長いよ（泣））」

そんな朝ごはんが二週間も続くと思うと・・・何だか、やだ

―――　二日目

「昨日は朝ごはんで断念したがその朝ごはんもクリアしたんだ、フフッ。俺って対応能力が高いのかもな」

そんな事を考えながら魃椎家の庭でのんびり過ごしている

「郭銀！今から犬の散歩に行くんだけど一緒に行く？」

このご時世に犬を飼ってるなんて、やっぱりブルジョアなんだな・・・最近はただのＳＭ家族くらいにしか考えてなかったけど

「ほら、名前は奴隷よ」

・・・・・またパパですか、そして名前が。

「・・・・ごめん、俺部屋で寝てくる」

いくらなんでもクライアントを散歩させる勇気はありません

―――　五日目

「お！郭銀！今日も散歩か、偉いな！」

「子供扱いすんじゃねぇよ！まぁ頑張るよ」

まぁ三日も頑張って犬のパパを見ていたら慣れてきて今では町の人に挨拶されるくらいに成長したんだよ、つか皆犬に突っ込まないんだよなぁ～・・・・・慣れてるのかな？

――――　庭

「あぁ～、疲れた」

結構回ったしな

「郭銀！今から昼ご飯だから一緒に食べましょ？」

おっもうそんな時間か・・・・でもいつもこれからが大変なんだよな、気を引きしめないと

「おう！」

――――　食卓

しかし来てみたけど以外に普通の炒飯だな

「まぁとにかく、いただきま「待って、郭銀君。これも」あっどうも」

ママさんから牛乳を貰った、炒飯に牛乳って合うのかな？まぁ郷に入れば郷に従えって言うし飲むけど

ゴキュ

「そう言えばママさん、此処ら辺って牛乳も採れるんですか？まさか飼ってるとか？」

冗談半分で言ってみた

「違うわよ？その牛乳はメス犬から搾り取ったやつだから、まぁ人によっては牛乳（うしちち）なんて言う人も居るげど」

アハハ、っと笑うママさんに共感できないしちゃいけない自分が居た

―――　七日目

ゴキュゴキュ

「あぁ～変な気分！」

慣れなきゃいけない、そしてホントに慣れる自分が嫌い！

「郭銀！今から買い物しに行くから付いてくる？」

最近、郭銀！って言われてうれしかったことがないな

「うん、行くよ」

――――　町

「ん～この首輪も捨て難いし、こっちのハナフックも・・・・・・どっちが似合うかな？」

そう言いながらパパさんにハナフックと首輪を付けるのをやめなさい

「・・・・どれも似合ってるよ？とりあえず部屋に帰っていいかな？」

いままで堪えてきたけど、それはできねぇ！！

――――　九日目

「郭銀！このハナフックなんかいいんじゃない？」

「いやいや、こっちのもう少しきつめの方がいいよ」

・・・・・慣れました（泣）・・・・・もう、自分がホントにキライになって来た・・・・でも今は昼食までスムーズに行けるんだ、この調子で夜まで行くぞ

「郭銀！そろそろ晩御飯だから帰ろうか？」

フフッもうすぐだ

「うん、行こう」

――――　食卓

「はい、郭銀君」

そう言って出されたのはパパさんが食ってる物と同じ物でした

「・・・・・部屋に居ます」

俺は約束の二週間まで晩御飯は食べなかったいや、食べれなかった・・・・

――――　二週間目

「・・・・・今までお世話になりました・・・・さようなら、金輪際来ません」

俺は振り向かないで愛紗達が居る場所に走って向かった

――――　Ｓｉｄｅ魃椎

「・・・・・今までお世話になりました・・・・さようなら、金輪際来ません」

そう言うと郭銀は振り向かえる事なく去って行った

「ねぇ、今回は最後までもったわね？」

ママがそう言った。そう、実は私はパパにお金を借りに来たり、郭銀みたいに融資して欲しいって言ってくる人の中で気にいった人を二週間だけ家に住まして何日で逃げ出すかっという遊びをしていた

「うん、それにかなり今回は面白かった」

凄く満足☆

「・・・・・あら、また“カモ“が来たようよ？」

ん？あっホントだ

「・・・・・それじゃあ行こっと」

――――　城（Ｓｉｄｅ空）

「馬鹿！馬鹿！マジで馬鹿！！この二週間ほど心の死を心配した事ないってくらい怖かったんだぞ！！！」

俺が戻って来たってのに一刀と桃香は月と詠のお茶飲んでるし！

「まぁ、まぁ、とにかく無事でなによりだよ」

一刀がそう言ってすぐにお茶をズズッっと飲んだ・・・・・・・絶対に心配してなかったな（怒）

「ハッ！いいんですよ、お前達は俺より軍資金を気にするような奴らだしね！」

クソッ、皆俺なんていらない「ポン」え？

愛紗が俺の肩に手を置いた

「あっ愛紗、やっぱり俺を心配してるのは「お前から女の匂いがしかもかなりするのだが？」・・・・え？何？疑ってるの？」

しかたないじゃん？二週間あの家に住んでたんだから！

「・・・・信用してたのに」

そう言うと青龍堰月刀を振りかざしてきた

「・・・・・・・・どうぞ」

もう抵抗するのがめんどくさいので潔く首を差し出した

「・・・天誅！！！」

チャンチャン、みたいな？

32話　・・・何だか、やだ（後書き）

空「イェーイ！次回予告担当の空です」

星「今回はプレセアの変わりに私が」

空「しかしやっと地獄から解放されたって感じだよ」

星「魃椎家？だったか？お主だってやってる事は対して変わらんだろ？」

空「自分がやるのと他人にやられるのはかなり違うんだよ・・・・あっ、思い出してきたら気持ち悪くなってきた・・・」

星「・・・・なら早く次回予告をしよう、次回！袁紹に攻められ命からがら桃香様の元を尋ねてきた伯珪殿！」

空「普通の人が来たと同じに袁術と呂布達が結託して攻めて来る！」

星「次回、「普通の人が来た・・・あっ、公孫賛だよ？わかんなかったかな？」です」

空「じゃね！」

アンケート？と更新についてです（前書き）

ホントにすんません

アンケート？と更新についてです

どうも、久しぶりのつくねです。まずは最近更新しなかった訳ですがケータイが止まってましたｗｗケータイ代が三万円くらいになって親にこっぴどく叱られて無理矢理ケータイを止められていて、最近やっと許可がおりて使えるようになりました。

高校生ってお金が掛かるんだね☆びっくりしちゃった☆

さて、本題ですが

美羽と婦警さん（七乃）を回収するかしないかアンケートをとりたいと思います

・・・・・まぁ正直、空が七乃に向かって

「俺を逮捕してください」

って言わせたいだけなんですけどねｗｗｗ

あと更新についてはやっぱり9月くらいまで更新できません、理由は小説の書き貯めをしておかないと更新が不定期になりそうだからです。この小説も後半に入ってきたので

できれば前のように一日一回の更新を目指したいので、少しの間ですがすみません

３３話　普通の人が来た・・・あっ、公孫賛だよ？わかんなかったかな？（前書

おっ久しぶりです！
友達と女の子達と酔った勢いで投稿しました！
未成年だろって？気にしない！

33話　普通の人が来た・・・あっ、公孫賛だよ？わかんなかったかな？

今、公孫賛が城に居ます・・・・・袁紹だか袁術かにやられて桃香に助けを求めて来たらしい

「・・・・すまない桃香急に押しかけてきて」

公孫賛が申し訳ないように言う

「ホントだよ、恥ずかしくないの？一回は俺達を捨てといてその捨てた人に拾ってもらうなんて」

・・・・・・・・なんて言えたら面白いのにね？（妄想でした）

「空よ、お主魃椎家に行ってから性格が前にまして酷くなってないか？」

心を読まれた！！

「小さく声に出ていたぞ？今の心を読まれた！！も」

なんと、これじゃ皆から酷い人と思われるじゃないか

「・・・・・・・・・・」

星がめんどくさくなりツッコミを放棄した

俺と星が漫才をしている間に公孫賛が仲間になった

「なら、白蓮が仲間になった祝いに歓迎会でもするか！」

一刀が立ち上がりながら言った

「・・・！！、そうだよ！やろよ！歓迎会」

いい事思いついちゃった☆

そしてその夜に歓迎会は始まった

「えぇ～、公孫賛？ハム？「公孫賛だ！」・・・あらためて、公孫賛が仲間になった事を祝して！」

「「「「乾杯！！！」」」」

そして皆がお酒を一気飲みする、でもホントは一気飲みはいけないんだぞ☆

「・・・・なぁ、何でお前急に乗り気になったんだ？どうせなんか企んでるんだろ？」

一刀が酒を片手、しかもニヤながらだからちょっと腹立つ

「まぁ、そりゃただでは転ばない空さんですからね。・・・・・・愛紗を酔わせるんだよ」

なんだよ、一刀がすっごいガッカリした表示をした

「・・・・俺、桃香と飲んでるは」

そう言って一刀が俺の元を去って行った

「待って！行かないで！私を見捨てな・・・い・・・で（泣）・・・・・・・んな事やってないで愛紗見に行こ」

ホントに何やってんだろ？

「愛紗、飲んでますかぁ！！」

愛紗の元に向かうとちびっ子と飲んでた

「あっ！空しゃん！」

呂律の悪いプレセアがすぐに俺の右足を掴んだ

「！！？・・・・プレセアさん、何で俺は右足を掴まれたのでしょうか？」

「ヒック！・・・らって空しゃんとお酒にょみたいからぁ～／／／」

そう言いながら俺の右足を伝ってよじ登って来た

「えぇい、離せ！ってクサ！酒クサ！！何で三分前に『乾杯！』ってやったのに何でそんなに酒クサいんだよ！」

中年オヤジが酔っ払った時の匂いがする

「あわわ～／／／・・・・・あわわ／／／」

今度は雛リンが左足を掴んできた

「あわわわわ！！お前もか！お前もなのか！？」

雛リンも同じく左足からよじ登って来た

「・・・・・・・」

無言でモモに右腕を掴まれました、目の焦点あってないから一種の病気みたいだ

「なんなのだ？鈴々もやるのだ！」

余った左腕を鈴々に掴まれた

「ってお前は酔ってないだろ！？ほら、一刀の所に行ってなさい！」

「だってお兄ちゃん、桃香お姉ちゃんと朱里とにゃんにゃんしてるのだ」

俺はそれを聞いて体は動かないので首だけを真後ろに居る一刀達の方に向けた

「ほら！ご主人様もぉ～」

「はわわ！ごごっご主人様！こっちも」

「おいおい待てよ、俺は一人しかいないんだから（ニヤけ顔」

・・・・・・死ね、俺の手にデスノートがあったらまずお前を俺は殺す

てか何であんなにアッチはイチャイチャしてんのに俺は今なにしてる！？ちびっ子に両腕両足掴まれます！なんだこの温度差！！

「何でだよ、いつもイチャイチャするのは原作主人公の一刀だけ。しょせん作者の気まぐれと偏見で、できた小説の主人公はイチャイチャしちゃいけないのか・・・・・」

そしていつも俺の回りにはちびっ子達・・・・・俺は何かい？保父さんか何かなのか？

そう思ってるとお酒を片手に持った愛紗がゆっくりと俺の方に近付いてきた

「愛紗！そうだよ、俺はお前を待っｔ「バキ」」

アレ？何で俺は愛紗に出会い頭に眉間にグーパンチをされなきゃいけないんでそうか？しかもまだちびっ子達は俺を離さないし

「・・・・ヒック！・・・・・座れ」

いきなり愛紗に『座れ』と命令されました

「・・はい・・・・ちょ、今はマジで離して。・・・・・・うん、いい子達だ」

ちびっ子達を説得して地面に正座をしました

「・・・いいか？私は前々からお前には言わないといけないと思っていたから今言うが」

まさかの告白ですか？照れるなぁ～／／／

「・・・・・・少しは真面目に仕事をしろ」

妄想乙ｗｗｗ・・・・・・（泣）

「お前が仕事をサボるたびに！私はお前を探さなければならないし、お前の真似をしてご主人様や鈴々まで仕事をサボりだす」

その二人は元からです、断じて！俺のせいじゃない。てか愛紗さん絡み酒ってやつですか？貴女

俺の勘ではお酒が入った愛紗は俺に甘えてくるって計算してたんだが・・・・・・まさか1番のハズレを引くとは

「聞いているのか！！」

また眉間にグーパンチ、もぉ！鼻血出たじゃん！

――――Ｓｉｄｅ　公孫賛

「・・・・・・グスン」

・・・・いや、別にいいんだ。私は新参者なんだから・・・・・・・私の歓迎会で誰も私に話しかけてくれなくても

「おぉ、伯珪殿。主役が一人淋しくお酌ですか？」

ほんのり頬が赤い星が私に話しかけてくれた

「・・・・星、そうだよな！私はこの歓迎会の主役なんだ！目立ってもいいんだよな！？」

「いえ、別に構わないですが・・・・・どう目立つおつもりで？」

うっ、考えてなかった・・・・・・でも私は主役なんだ

「・・・・・！・・・・一つだけ、一つだけ伯珪殿が目立つ方法があります」

星はホントに役に立つな！

「で！その方法は！？」

「ゴニョゴニョゴニョ」

――― Ｓｉｄｅ　空

あれからずっと説教・・・しかもたまに眉間を殴ってくる、何もしてないのに（泣）

「キャ、キャァァァ（棒読み）」

月の棒読みの悲鳴が聞こえた先を見てみると、銀行強盗が被ってるようなマスクを被った星が月を人質にとっていた

「私は悪者だ！この娘を返してほしければメンマ一ヶ月分よこせ！」

悪者は悪者と普通言わないし、メンマ一ヶ月分って

「この悪党め！わたしが退治してやるぅ～」

愛紗がフラフラになりながら青龍堰月刀を構えた

しかし、何で星はあんなマスクを・・・・マスク・・・あっ！俺もマスクあるじゃん、そうか！星は俺ためにこの舞台を！そうと決まれば！

俺はダッシュで自分の部屋に戻った

――― Ｓｉｄｅ　公孫賛

星が私に言ったのは

『私が今回は悪役になりましょう、そして私が・・・・そうだ、月を人質にとります。そして伯珪殿はこの仮面を付けて颯爽と現れて私を倒してください。そしたら今日のホントの主役になれるんです！』

っと言われたけど、この仮面は・・・・・まぁとにかく。この仮面を付けて星を倒す！そしたらもう皆私を残念なんて言わなくなる！

「（お！星が月を人質取った、よし！頑張るぞ！）」

「ちょっとまt「ちょっと待った！！」へ？」

私が出ると同じにおかしな仮面を付けた男・・・・・・というか空が出てきた

「（あれ？伯珪殿じゃない、まぁとにかく）誰だ貴様！」

「俺か？俺は、正義の味方！カイバーマン！！今の遊戯王しかしらない子供達に初代遊戯王を教えるために存在する！訳あって今回は人助けをしている！」

・・・・・やっぱり空だ

――― Ｓｉｄｅ　空

やっべ、マジで気持ちいい。カイバーマンの衣装を作ったはいいがなかなか出す機会がなかったんだよね

「フッ人助けか、いいだろう！人質を助けたくば私を倒してみろ！」
星が自分の武器を俺に向けながら構えた
「いいだろう！その勝負、受けてたつ！」
デッキホルダー的なのから遊戯王のカード（柄を似せただけの厚紙）を出した。一応カイバーマン何で遊戯王で戦わないと
「いざ！」
「尋常に！」
「「勝負！！」」
そう言って俺と星はお互いに向かって走り出した・・・・・・・・・・けど
「デリャァァァ！！！貴様ら！勝手に城に忍び込んだんだ、覚悟は出来てるな！？」
愛紗が俺と星の間の地面を青龍堰月刀で切ったと思ったらそんな事を言ってきた、てか地面ひび割れてる
「しかたない、今回は引き上げよう。さらばだ！！」
星は近くの屋根に飛び乗ると屋根を伝って逃げた
「ならば俺も」

俺も星と同じように逃げた

「って、何で公孫賛はそんな暗いの？」

服を着替えて来たら公孫賛が黒いオーラを出していた

「お前が悪い！！！」

公孫賛に怒られました

――――　翌朝

「う～あ～、気持ち悪い」

朝から皆、そればっかり。俺は大丈夫なのかって？お酒最初の一杯しか飲んでないもん。ずった愛紗に説教されててお酒なんて飲めない、てか皆一応さ軍義してんだから

「失礼します！報告します、袁術軍が奇襲を仕掛けてきました！」

兵隊1が報告してきた

「なっ！事前に・・・オエ！」

朱里が頑張って何か言おうとしてたけど、ゲロっちまってるぜ！

「あわわ～・・・・・」

雛リンも限界のようだ

「・・・・とにかく、軍の準備してくるな」

ホントに大丈夫かな？袁術戦

３３話　普通の人が来た・・・あっ、公孫賛だよ？わかんなかったかな？（後書

空「お久しぶりです！いや～なかなか投稿しなかったな、作者」

プレ「確かに、最初は書き貯めする為だったんだけど最近は合コンばっかり行ってるみたいです・・・・私、そういう人が嫌いです」

空「まぁ、さ？作者も青春を満喫する高校生って事だよ」

プレ「え？なんですか？空さんもそっち側ですか？だとしたら私にしばらく近づかないでください」

空「違うよ！！作者は馬鹿だからしかたないなぁ～っと思って発言しただけで共感はしてないよ！」

裏切られた、自分が作った主人公に裏切られた

ｂｙ作者

プレ「ならいいんですが。さて！それでは次回予告です！本格的に袁術に攻められ始めた私達！」

空「しかもその最中に皆から空は袁術軍のスパイじゃないかと疑われ始めた！次回！『袁術が、攻めて来た』です、バイ！」

プレ「バイ！」

３４話　袁術が、攻めて来た（前書き）

やべ、スランプだ

３４話　袁術が、攻めて来た

皆さん、事件です

袁術達が攻めてきました。しかも奇襲ですワ～オ、ビックリ

「朱里、状況はどんな感じ？」

「我が軍の兵力に白蓮さんの兵隊さんたちを加えて、ようやく形を整えられたって感じですね」

さずに皆、慣れてきてたって感じがするな。最初に比べて・・・・・・俺？

「・・・・・お前もかブルータス！？・・・・何が言いたい俺」

めっちゃ緊張してます

「・・・何で緊張してんですか・・・気持ち悪い・・・あっもちろん昨日のお酒がですよ」

プレセアが俺に冷た・・・・・・いつもだった

「プレセア、なんとか出会った時のように優しく接してくれませんか？おじさん心が壊れそうだよ」

「・・・・・・・無理です・・・・うん、無理です」

何で二回言った！？しかも結構考えて『無理』って言われた・・・・

・ハァ～　←ガチでショックな空

「だって、私達はもう出会ったんですから／／」

・・・プレセア、今なら貴方に愛してると言える気がする

「プレセア、俺と子供をヒッ！！！」

プレセアと話していると後ろからシンジラレナァ～イくらいの殺気が！！？

「・・・・・・・・・・」

後ろを見ると無言で青龍堰月刀を構えながらジッっと俺を見つめる愛紗

「（・・・まぁ、わかってたけどね）」

俺をナメるなよ、何回このやり取りをやってると思うんだ。そしていつもそこで死ぬ・・・・・・・また死ぬのか

「あの、子供を。なんですか？／／／」

プレセアには俺の後ろの魔王に気付いてないごようすで

「・・・・子供を～・・・・・・・子供を・・・朱里！そう言えばさっきの斥候の報告を！！」

言い訳が思いつかない、つまり逃げた

「え！？あの、斥候の報告によると袁術軍の中に謎の部隊が居るとの報告です」

「うん！謎の部隊・・・あっ呂布じゃん」

そういや呂布が袁術と組んで攻めてくるんだったな

「リベンジだな・・・・・じゃあ！準備してきま「待て」何でそうか？愛紗さん」

「何故、お前がその謎の部隊を率いている人物が呂布だと知っているんだ？」

あっ、やべ・・・どうしよ。皆が俺を見てる

「・・・・空さん・・・ところで子供の話しわ？／／／」

貴女はずっとそれか！！

「空、何で知ってるか話しを聞いていいかな？」

一刀君まで真剣だよ、マジでどうしよう

「・・・え～・・・あれだよ・・・そっそう！実は俺は未来が見えるんだな！！」

「嘘ならマシな嘘を言え」

半分はホントなのに、まぁ5秒だけだけど

「まぁ、いいじゃん？細かい事は「いいえ、これは重大な問題です」何故だい、朱里」

朱里が俺の台詞にかぶせてくるなんて

「私が出した斥候でも部隊を率いている人物はわからなかった。なのに空さん、貴方は皆さんとおしゃべりしていただけで空さんが特別に自分の斥候を出した痕跡はない」

朱里がコナン君が推理する時にするポーズをしながら名探偵さながらに推理していく

「つまり！残る選択式は二つ。空さんが元々この戦争が起こるのを事前に知っていた、しかも誰が攻めてくるかも。もう一つは・・・・・空さんが袁術軍のスパイか」

ヤバイ、皆が驚いた表示で見てくる。でも一番に驚いてるのは俺だよ？まさか転生した事を隠すために嘘ついてたのがこんな、まさかスパイだと疑われるとは

「待ってて、証拠は！そんなにいうなら証拠があるんだろ！」

必要ないけど朱里がコナン君でくるなら俺は犯人の真似をしようと思った。そんな性格だね、俺

「はい・・・・・これです」

そっそれは！！

「はい、確か『メイド服』でしたか？まぁとにかく。この二つのメ

イド服はこの軍の誰にもサイズは合いません、そこで私は一つの考えに至りました。袁術軍の袁術さんと張勲さん達にならピッタリなんじゃないかって。だから斥候には袁術さんと張勲さんのスリーサイズを調べてもらいました。案の定、ピッタリでした」

まさかそれが見つかるなんて、実はこの戦争が終わったらこっそりと袁術と張勲を確保してから着せようと思ってたメイド服が見つかるなんて。

「これこそ動かぬ証拠！つまり、スパイはお前だ！！」

犯人はお前だのノリでスパイはお前たと言われた。でも待って、俺はスパイじゃない！

「待ってよ朱里。確かに袁術達に合わせてメイド服を作ったのは認めよう、でも俺には動機がない！ましてや幼なじみの愛紗を裏切るような事をする訳が「そこです！」なっ何が？」

「空さんは不満があったんじゃないですか？幼なじみというだけでプレセアさんやモモさんと仲良くしただけで切り掛かられる。そんな関係が空さんをスパイにした、違いますか？」

なんだ？今日の朱里は腹立つぞ、まぁ確かにさっきもプレセアと話してて斬られそうになったけど

「そうなのか？空、すまなかった。私は・・・・そんな事も知らずに・・・悪かった、謝る。だから・・・・・・自首してくれ。私は待ってるから、お前が出てくるのを」

え？何？この雰囲気、さっきから名探偵コナンの犯人が捕まった時

に流れる音楽が何処からか流れてるし

「空さん、実家のお袋さんも泣いてるよ。ゲロ（白状）っちまえよ」

朱里がだんだんと刑事っぽく、あと俺ん家母さん居ない

「・・・・わかりました、朱里刑事。白状します」

このやり取りに飽きちゃった

「えぇ～・・・・つまり、空は一回死んでて。その神様に生き返らしてもらって此処に居ると？しかもこれから起きる戦争とかがわかるって事か？まぁ確かに空ってこの時代の人なのにｗｗｗこれとかメイド服とか知ってたからな」

一刀が今の俺の現状を簡単に言ってくれた

「・・・・信じられない・・・・仮にその話しを信じたとしよう、なんで空は一度死んだんだ？」

あっそれ聞いちゃう？それ聞いちゃう？

「・・・自殺か？」

今の現代を知っている一刀がそう言った

「何だ？敵の将に殺されそうになって自害した、とかか？」

愛紗さん、今の現代はそんな恐ろしい場所じゃありません。それじゃあ夜のコンビニでエロ本も買えないよ

「それと別に自殺とかじゃないからな？もし自殺しそうになったら梨本Ｐの『死にたがり』聞いて元気もらうから。あと死んだ原因は・・・・・・病気ダヨ」

「・・・・なんか怪しいな」

言える訳ないだろ、皆と飲み会してて酔った勢いでモチの早食いしてて喉が詰まって死んだなんて

初めて神様に会った時も『モチ食って死ぬとかｗｗマジでうけるｗｗｗ』まぁ、その俺を見る哀れみのおかげで転生できたんだけど。今思ったらかなり腹立つな、あの野郎

「まぁそんな訳だから「空さん、少しいいですか？」なんだ？プレセア」

「空さんは私達に起こる戦争や未来がわかるんですよね？空さんは此処の誰かに会いたかったから来たんですか？それとも私達の、この軍の未来を何か変えたくて来たんですか？」

たまにプレセアって頭いいよね

「ん～・・・まぁ、両方？かな」

つか今日は皆どうしちゃったの？推理とかしちゃってさ

「・・ちなみに誰に会いたかったんですか？／／／」

プレセアがそう言うと何人かの頬が赤くなった・・・・あれ？なんだろ、もし俺が愛紗って言ったら他の頬が赤い人達に斬られるイメージが頭の中を巡ってるんだけど

「・・・あい・・・あ～・・・・み、皆に会いたくてな」

ごめんなさい、今の俺にはこれが限界です

「・・・・ハッ！・・・・そろそろ戦の準備をしましょう」

今明らかにプレセアに鼻で笑われた『ハッ！』って

「モモ～「ハ？（怒）」あれ～？モモですか」

モモにはヤンキーみたいに言い返えされた

「・・・星さん、皆さんが怖い」

「お主が悪いぞ」

わかってるけど、それは言わないでほしかった

そしてなんやかんやあって、今は戦争中です

「わぁ～～・・・だるい」

そう言いながら近くの兵をブスリ

「俺だって一端の将なんだぜ？こんな一般兵なんかにやられるかよ」

またブスリ

「さっきも俺がスパイだとか皆言い出すしさ」

ブスリブスリそしてブスリ

「だいたいさ！何で俺が「わかった、わかったからそれ以上敵を殺すな。敵が可哀相だ」そう？」

星が可哀相と思うって、つかそろそろ呂布が出てきそうだ「見つけた」来ちゃった

「・・・お前・・・やっぱり生きてた」

心配してくれてありがとう

「実は俺な？さっきから呂布を探してたんだよね、俺の我が儘なんだけど少し聞いてくれるかな？」

「・・・・聞くだけ・・・・なら」

「呂布、もう一度俺と勝負しよっか？」

３４話　袁術が、攻めて来た（後書き）

空「ちょっとカッコ付けて呂布にリベンジを申し込んだ空です！」」

星「それを近くで見ていて少し引いた星です」

空「え？マジで？・・・・・・え？マジで？」

ちょっとショック・・・・いや、かなりショックだ

星「・・・・冗談じゃな・・・・・ジョウダンダヨ」

多分、俺が涙目で星を見たから真実を言わないでくれたんだろうな・・・・でも『冗談じゃない』ってはっきり聞こえたよ

星「・・・まぁ、とにかく次回予告。呂布にリベンジを申し込んだ空！」

空「しかし空には秘策があった！！・・・・負ける気がしねぇ。次回、『リベンジと賭け』です。バイビー」

３５話　リベンジと賭け（前書き）

更新が二日に一回になるかもしれない

35話　リベンジと賭け

「呂布、もう一度俺と勝負しよっか？」

俺は呂布を指差しながらカッコ付けながら言った

「・・・おい、そんな事を言っていいのか？前回は負けて横腹を斬られたんだぞ？そしたらまたあの根暗な愛紗が出てくるぞ」

星の言う事は確かだ、だけど俺をナメないでほしいな。あと根暗愛紗はちょっとやだな

「でも俺だって呂布に負け・・・・勝負がうやむやになってから何もしなかった訳じゃないぞ？頑張って合体剣を極めてたんだから今度は大丈夫だよ」

「負けは認めないのか」

だって負けてないから！星が俺を気絶させたからしかたなく！自分の陣地に戻っただけだもん

「・・・・いい・・・・元々そのつもり」

そう言って呂布が自分の武器を構えた

「待てよ、その前に少し賭けをしないか？」

「・・・・かけ？」

そう！実はこれはこの前の戦の時から考えてた事なんだよ

「あぁ、この勝負で俺が勝ったら・・・・ペッ・・・・娘になってください！！」

「は？」

「・・・・・？」

星と呂布がわからないという表示をした

「あと空、今娘になってくださいと言う前に『ペッ』って言ったよな？まさかとは思うが『ペットになってくれ』と言うつもりだったのか？」

やはり星は感がいいな。そうだよ、呂布にペットになってくれって言うつもりだったよ。だって一度だけだけど呂布とご飯を一緒に食べた時のあの表示がマジで癒されたんだよ！でもペットじゃ失礼だと思って育てるなら娘でもいいかなって思ったから娘にしたんだよ！

「悪いか！！」

「悪いわ！！」

言い返えされた

「・・・・わかった！なら呂布がご飯を食べる時だけは俺が呂布のパパになる！おk！？」

「妥協のつもりか」

とにかく！どうなんだい呂布！

「・・・・・わかった」

よっしゃ！来た！！！

「そのかわり、恋が勝ったら好きなだけご飯たべさせて」

「全然大丈夫！！さぁ！やろうか！」

この勝負に命を賭けるぜ

「・・・・・行く」

そう言って呂布が俺との間合いを素早く詰めた所で呂布が方天画戟を振り下ろした

「おっと、危なぁ～もう少しで転ぶ所やった」

別に吉本をやってる訳じゃなくて呂布が振り下ろして来たのを横に避けてからこけただけだよ？

「結局転んでいるのではないか」

「黙らっしゃい」

でも心の中では『ツッコミをありがとう』と言葉に出せない俺はツンデレ

「・・・・また未来を見た？」

呂布はどうやら普通に呂布の攻撃を避けたのが気になってしかたないみたいだ

「いや、今回は普通に何もしないで避けただけだよ」

さて、此処で俺が呂布に戦略的撤退した後の事を少しだけ話そう

俺は呂布と勝負した時の戦略的撤退が許せなくなりその日から攻撃を“避ける”練習をしてきた。練習メニューは愛紗と鈴々のしかも二人同時の攻撃をひたすら避ける練習だった

――― 回想

「ホント・・・いいんだな？」

「当たり前だ、さぁ来い！今来い！すぐに「うにゃ！！」にゃぁぁぁ！！」

鈴々が喋ってる最中に切り掛かってきました

「馬鹿！切るなよ！」

「だって『さぁ来い！今来い！』って言ったから」

馬鹿！そう俺が言った時は『・・わかった、なら行くぞ』くらいの絡みを期待してんだよ

「・・・・・なら、行くぞ？」

「おう！絶対に全部の攻撃を避けて「ハァァァ！！」ってハァァァ！？」

喋ってる途中で愛紗に切り掛かられた

「馬鹿！切り掛かって来るなよ！」

「ちゃんと手順は踏んだだろ？」

だからって喋ってる時に「もうめんどくさいから行くのだ」へ？

「うにゃぁぁあ！！！」

「いにゃぁぁあ！！」

――――　回想終了

「・・・・・大変だった」

「苦労したな、頑張ったぞ」

僕の気持ちをわかってくれるのは星だけだよ

「・・・・なら、もっと早く行く」

呂布がさっきとは違うスピードで俺との間合いを詰めて来て今度は

自分の武器で突いた

「フンヌ！」

俺はそれを華麗に回転しながら避けた

「・・・・・やっかい」

突きで大幅に移動してしまって少し離れた所からそう呂布が言った

「どう？俺の事をパパと呼ぶ覚悟はできたかな？呂布」

愛紗、俺達に娘ができたよ！

「・・・なぁ空、さっきほどから思っていたのだがな？」

星が俺に近づいて来て耳打ちでそう言ってきた

「いつ、お前は自分の武器を抜くんだ？まさかとは思うが・・・・ホントに“避ける“練習しかしてないのか？攻撃は・・・・するんだよな？」

星の美声にゾクゾクしながら自分の真実にビックリしてしまった

「・・・・どうしよ、考えてなかった。いや！この前の呂布のラッシュを避ける事しか考えてなかったから！から・・・・考えてない、しかも合体剣何てもう何ヶ月使ってないか。あっ将とはって意味だよ？ザコは切ってるし」

呂布は俺を攻撃できても俺はその攻撃を完璧とは言わないがかなり

避けられる。これで負ける事はないけど俺は攻撃できても中途半端な物で呂布に当てる自信がない

「勝てないじゃん、負けもしないけど」

愛紗、娘は俺達二人で頑張って作ろう。ハッスルするから

「呂布！あの、今日はお開きにしよう。お互いに勝てないし負けないから今回はやめ！」

「・・・・・やだ、恋は勝ってお腹一杯ご飯食べる」

あっそうだった、今は呂布の軍は腹減ってるから袁術の軍に協力して俺達の軍を攻めて来たんだったけ。だから俺が出した条件を呑んだのか、ご飯食べられるから

「・・・皆もお腹空いてる、だから頑張る！」

また呂布が俺に突っ込んで来た

「あっ」

呂布が俺の所に来るまでに何かに躓いてこけそうになっているので助ける為に呂布の元に行こうとしたら

「おい、りょ「ちんきゅーきっく！！！」へ？グバ！！」

ちっこいのに顔面をおもいっきり蹴られた、痛い

「・・・・・痛い」

呂布も転んだせいで痛いらしい

「恋殿！大丈夫ですか！？あの玉無しにどこかを斬られたのですか！？」

「テメェ、いい度胸してんじゃねぇか。玉無しだの助けようとして逆に攻められる」

確か陳宮だったか？あの小娘（怒）

「テメェ何て名前ではないのです！陳宮って立派な名前があります！」

「じゃあ陳宮、おま「気安く呼ぶななのです！」死ねか？なぁ！こっちはお前の蹴りで鼻血がドバドバでてんだよ！」

ナイアガラの滝もビックリなくらいな！？服にも大量についてるし

「空！無事か・・・・って、空・・・お前、血が」

ホントにいいタイミングで来るよね、愛紗

「っ！！お前か！！！」

愛紗が呂布に切り掛かろうとしてる

「違う！いや、違わないけど違う！！まっ・・・柔らかい／／・・・じゃなくて！！待って！！」

今にも飛び掛かりそうな愛紗を抑えながら愛紗の胸の感触を堪能しながら止める

「はぁ、はぁ、なら誰なんだ・・・星か？」

星を睨みながら言うのをやめなさい

「違うから、これは俺がこけて出た鼻血だか「音々音がやったのです！」庇ってやってんだから黙ってろよ！「お前か！！」愛紗も落ち着け！」

あ～もう！陳宮は面倒だし愛紗は柔らかい・・・愛紗は血の気が多くなってるし

――― ３０分経過

「黙るのです！今は恋殿が擦り剥いた傷を治療してる最中なのです！」

「お前こそ先程から言っているだろ！空に謝るか私にお前を斬らせろ！」

「そろそろ黙ろうか！二人とも！！」

――― １時間経過

「ごめん、わかったから頼むから黙ろう。うん・・・・よし！いいぞ」

やっと黙ってくれた、つか何で俺が謝ってんの？

「でさ、呂布だっけ？俺達の仲間になってくれないかな？」

そうですよ？ホントは一刀と桃香が来て止めてくれたんですよ？・・・・死ねばいいのに

まぁ、そんなこんなで呂布軍が仲間になりました。戦争も原作の通りに終わりました。でも・・・・

「半径３ｍ以内に入るななのです！！」

「黙れ新入り！！あと半径３ｍってなんだよ！あぁ？（怒）」

マジで腹立つ、死ぬか？

「・・・・って！あぁぁぁぁ！！袁術の事忘れてた！！！」

回収すんの忘れてた！ヤッベ行こう！

「ちょっと行ってきます！あっ一刀も来い」

一刀を連れてレッツゴー！！

「居ない、袁術達が居ない」

「そんな事も知ってるんだ」

頑張って探してるのに見つからない、努力が実るなんて嘘だ。実らないじゃないか

「こんな世の中だから不良が増えるんだよ」

「世の中に文句を言うなよ」

一刀は知らない？俺は部屋でそんな事ばっかり考えてるよ

「ん～・・・・ん？・・・・フヒヒヒヒ！！見つけたぞコノヤロ！！」

最後は猪木さん風に言った

「ん？あっホントだ、でも2？くらい離れてるのによく見えたな」

俺の女の子センサーがピーンっと来たんだよ

「じゃあ、ＧＯ！！」

「なっ何じゃ？お主ら？」

袁術が泣きながら言ってきた、いや、別に俺が泣かせた訳じゃないよ？来たら泣いてたの。まぁ自分の領土が奪われてたら泣きたくもなるわな

「美羽様美羽様、この一杯剣をせよってる人は蜀の将の郭銀さんですよ。そしてその隣に居るのは蜀の天の御遣いですよぉ～」

そしてこの危機感を全く感じさせない喋り方の人は張勲だな♪

「誠か！？主らはわらわの命を取りに来たのか？」

袁術は自分が俺達に殺される所を想像したのか子犬のように振るえだした、そしてその振るえてる袁術が可愛いのか張勲が袁術をニヤけながら抱きしめていた

「許してたも、もう蜀を攻めたりしないから」

今にも泣きだしそうな声でそう言った

「・・・・空、お前じゃないけどこの子はいじめたくなるな」

「お前じゃないけどってなんだよ」

「確かに今の美羽様はもっといじめてみたくなりますね～」

俺と一刀で雑談をしていると張勲がいつのまにか隣に居てそう言った

「てかお前は俺達が怖くないの？」

別に怖がってほしい訳じゃないけど

「だって、もし貴方達二人が私達を殺す為に此処まで来たのでしたらもう少し護衛なりを連れてくると思うんですよ。相手の私達だって殺されたくありませんから抵抗して天の御遣いさんを殺しに掛かるかもしれませんから」

さすが軍司って事かな？

「って？私達に何かお話があるのでは？」

そだった

「俺達の仲間にならないか？袁術も鑑賞用になら仲間にするよ？ハチミツも付ける」

「誠か！？七乃！此処は仲間になっておこうではないか！」

やはりハチミツと聞いて反応して袁術が釣れた。もう袁術が釣れた張勲も釣れる

「簡単に懐柔される美羽様も素敵ですぅ～。・・・なら美羽様が仲間になると言うなら私に反対はありませ、これからよろしくお願い

します。七乃と御呼びください」

張勲が釣れた、これで夢が一つ叶った。もう残ってる夢は愛紗と結婚くらいかぁ！？

「じゃ！帰ろか」

もちろん愛紗達の元に袁術達を連れて帰ったらシバき倒された上に縛り吊るされた・・・今上手い事言わなかった？俺

「その調子で縛り吊るされたせいで頭に血が昇ってフラフラするこの現象を上手い事治してくれ」

「・・・上手い事言うな！・・・・・無理言うなよ」

解放されたのは鼻から出ちゃいけない汁が出始めた頃だった

35話　リベンジと賭け（後書き）

空「・・・・・鼻が」

一「・・・・・鼻が」

プ「・・・・このように原作主人公とこの小説の主人公二人がダウンしているので雑談無しで次回予告です。新入り四人も此処の仕事になれたある日の午後」

モモ「突然ですが失礼。そんな時に七乃さんから空さんの興味をそそるような報告が来る！」

プ「次回、『奴隷市場と・・・悪魔（泣）』バイバイ」

３６話　奴隷市場と・・・悪魔（泣）（前書き）

南無三！
じゃなくて難産ですた

36話　奴隷市場と・・・悪魔（泣）

美羽達と恋達が仲間になって一ヶ月たった、今の皆の仕事は恋にはうちで将をやってもらう事になり。音々も軍師をやってもらってる

美羽は恋が飼ってる動物に興味があるみたいで恋に教えてもらいながら動物の世話をしている、七乃はもちろん！警備隊の隊長をして貰ってる。ちなみに七乃には手錠、警棒、ワッペン、笛、など婦警さんが持っているであろう物を全て渡してある。たまに本気で事件を起こして逮捕してくれないかなぁ～っと思ってしまう自分めぇ！！！

「っで、何て言った？」

そして今は軍義中で七乃の少しビックリしちゃう発言をした

「いえ、ですから。最近南側の治安が悪いと報告があったので警備隊の何人かを潜り込ませてみたらその南側でどうやら夜な夜な奴隷の売買が行われているらしいんです」

奴隷、そんな西洋文化な物まであるんだ・・・めちゃくちゃ行ってみたい

「（でも正直に言ったら殺される、冗談抜きで）・・・！・・・何て最低な奴らなんだ！！」

いい事思いついちゃった

「あぁ！そんな下劣な事が許される訳がない！」

愛紗が少し怒ってるみたいだ。ごめん、俺かなり興味あるよ

「そうだ！よし！なら俺はとりあえず一刀と二人でその奴隷が売買されている場所に行ってくる。下手に愛紗達女の子が行くと怪しまれるから俺達がとりあえず行ってきます！」

「あぁ！すぐに潰してきてくれ！そんなゴミのような連中！」

そのゴミに近づく俺って

そうして軍義は終了したけど愛紗達が次々と出ていくなか、七乃と星が残って今は部屋に俺と一刀と七乃と星の四人だけになった

「空、・・・・確か愛紗がこんな事を言っていたな」

星は俺に近づきながらそう言ってきた、七乃は一刀に何か喋りかけているみたいだ

「・・・人間が売買されていてそれを好んで見に行く奴らは人間ではないと怒りながら言っていたなぁ～・・・・空は、人間、だよな？」

こっ心にズッシリと来る言葉ですね。そして星はそう言いながら立ち去った、あっ！七乃の続いて出て行った。そういやさっき七乃と一刀が喋っていたけど終わった・・・・・！！？？

「一刀、どうした？」

一刀が真っ白に燃え尽きていた、真っ白にな

「・・・恐いよ、七乃・・・・・恐いよ」

一刀はそれ以上は喋らなくなった

「・・・・まだ、星でよかった・・・・・多分、今頃二人でさっきの反省会でもしてるんだろなぁ～と思うと・・・・恐いな」

あの二人って変な所は勉強熱心だから、悪い意味でとにかく今日の夜にでも奴隷を見に行こうと思う

――――　夜

ガヤガヤと夜なのにかなり騒がしい南側

「・・・一刀君、僕にはこの空気は堪えられないよ」

「うん、かなり臭いしな。まぁ早く行こ」

いたる所にヤンキー的な奴らと奴隷を買いに行きたであろう金持ちがかなり居る

「・・？・・・・・？（泣）・・・一刀君、僕早くお家帰りたい」

「どうした？急に震えだして」

だって！だって！・・・・・・・・居るんだもん、魃椎が

「ん？あっ、郭銀じゃない」

見つかった、やだ。恐い

「は・・・はい、魃椎もこんな所に来るんだ」

「うん、最近お昼に飲む牛乳が搾りにくくなったからってママが買って来てって」

そんなタマゴがきれたから買って来てみたいな感じで言われたんだ。つか買いに来るなよ

「じゃあ、俺達行くか「郭銀！」はい！なんでしょうか？」

郭銀と貴女に言われると寿命が5年は縮まるのですが

「私も行くから」

と言って俺の隣にピッタリとくっついてきた

「あわ・・・・あ・・」

「空！大丈夫か！？体だ段々と青くなってるぞ！？」

駄目だ、魃椎は以外と巨乳で胸が気持ちいいとか女の子の肌柔らか

いとかそんなのより俺の頭でずっとアラームが鳴り響いてるんだけど・・・・コイツは危険だと

「さ、逝きましょ？あっ間違えた。行きましょ？」

間違ってないと思うよ

――――　とある建物前

「此処よ、牛乳（奴隷）が買える場所は」

何処の世界に牛乳と書いて奴隷と読む奴がいる

「この建物なのか？意外に小さいな」

来たのはどう見ても少し小さいくらいの普通の家だ

「？何言ってるの？会場は地下よ」

地下なる物がこの時代にあると！あっ、俺も作ったじゃん

「もちろん“合言葉“も知ってるわよね？」

ん？

「何それ」

「合言葉を知らないと中に入れないわよ？」

そう言いながら魃椎がツカツカと歩き、家のドアを開けるとボブ・サップみたいな男が現れ

「・・・・劉備」

ボブ・サップがそう言った

「・・バイン」

そう魃椎が言うとボブ・サップが魃椎を中に入れた

「どう言う事！？何で桃香の名前が出て来たの！？」

「知らないよ！頼みの魃椎は中に入っちまったし」

そうだ、魃椎はもう中に入ってるからもう合言葉は聞けないじゃん。しかも見てると入る人入る人みんな合言葉が違うみたいだし

「・・・・！・・・なぁ、一刀。さっき魃椎は劉備って言われてバインって言ったよな？」

気付いたぜ、このカラクリに

「ん？あぁ、確かそう・・・・・・！・・・・そうか」

どうやら一刀も気付いたようだ

「わかったんなら、行こうぜ」

そう言ってボブ・サップの元に向かった

「・・・・関羽」

案の定、ボブ・サップが合言葉を言った

「・・・巨乳」

そう言うとボブ・サップはスッっと横に避け、俺が中に入りやすくしてくれた

「どうも☆」

俺は中に入り地下に続く階段を見つけて地下に下りた

――――　地下

そこではすでに始まっているようだ

「空！勝手に先に行くなよ」

一刀が来たようだ

「ごめん、ところで一刀は合言葉なんだった？」

「華雄で俺はヒンヌーって答えたら通をしてくれた」

頭のいい皆さんになら合言葉の謎はお分かりでしょう。

そう！合言葉とは、ボブ・サップがまず将の名前を言う。そして例えば「曹操」と言われれば。貧乳もしくはツンデレさんのようにその将の特徴を述べるだけの実に簡単な物だった

「しかし、関羽と言われた時は少しドキッっとしてしまった。バインボインか巨乳の二択に迫られるなんて」

危なかったぜ

「あら、通れたの」

わかってて置いて行ったくせに。この魃椎（ドＳ）が

「・・・・・なぁ、空。あれ見てみろよ」

一刀君がある場所を指しながら鼻血を流していた

「何だよ、その先に何が・・・・・なかなかにいい場所じゃないかい。まさか俺が鼻血をこうも自然に流してしまうなんて」

一刀が指指した場所にはお立ち台のような場所に奴隷らしき人が並んでいるのだけど

その奴隷の格好がボロボロの布みたいなので、際どい人はチクBや見えちゃいけない場所があらわに

「じゃ、私は買ってくるから」

魃椎はそう言い残し、どこかに消えた

「・・・・・なぁ、一刀。此処を破壊するの。明日にしない？今日はこの光景を少しでも堪能したいのだけれども」

いや、ね？この世界ってエロ本とかないし、愛紗とはエロシーンに行けそうで行けないからいろいろと溜まってんだよ。悪いかこのやろう

「・・・・・御意」

一刀も同じようだ

その日はホントに何もせずに家に帰って部屋に引き込もった

――――　翌日

「・・・・おい、人間のゴミ」

おはよう愛紗と肩にポンっと手を置いたらその手を掴まれて。その掴んだ手を握力テストでもないのに真剣に握られながらそう言われた

「あの、手を掴んでくれる事はうれしいんだけど痛いすぎて手の感覚がないよ。あと人間のゴミって」

今俺に持てる全ての力を使って平然とそう答えた。ホントは今にも痛いって言いながら床に転げ回りたいよ（泣）

「昨日、魃椎家から伝達が来たんだ。『貴方達のご主人様と将が際どい服を着た奴隷達を見て鼻血を流しながらニヤニヤしていた』っと報告をな」

事実だけど！魃椎さんよ、そんな事を言う為に伝達なんてしないでください！手が！握られ過ぎてボキバキピゥ～の連鎖が！

「言ったよな？人間の売買をして喜んでいる奴は人間のゴミだと」

「・・・買ってないよ？」

俺の責めてもの言い訳も虚しく。俺の手は潰れた

―――　軍義

「えぇ～っと。それでは愛紗さんと一刀さんと空さんが今度こそ。退治してきてくれるんですよね？」

七乃たんが優しく。子供に言い聞かせるみたいに言った

「「・・・・はい、御意に」」

どうやら一刀君もかなりの被害を受けたようだ。顔とか猫に引っ掛かれたの？ってくらいに傷があるし。あとは・・・・俺の口からは恐ろしくて

―――　また夜

「・・・・・此処であっているのか？」

愛紗も建物の小ささに驚いてるみたい

「うん、愛紗。入るには合言葉がいるから。まぁ合言葉って言って

も門番みたいな人が将の名前を言ってその将の特徴を言うだけだから」

そう愛紗に言って。俺は建物のドアを開けた

「・・・関羽」

やっぱりボブ・サップが出てきて関羽と言った

「・・・巨乳」

ボブ・サップが横に避けてくれた。さぁ！中に入る「空？」

「何で・・・・しょうか」

呼ばれたので後ろを向くと愛紗があくまで無表情なんだけど私怒ってますオーラをだしてる

「・・・・私はお前にとって巨乳なだけの存在なんだな」

恐い（（゜Д゜ll））・・・・ふざけてる訳じゃないよ

「・・・劉備」

「・・・・バイン」

一刀も愛紗の冷たい視線を感じながらもクリアだ

「・・・諸葛りょ「はわわ軍師あっ、じゃなくて貧乳」」

・・・・ボブ・サップが最後まで言うまでに愛紗がそう答えた。もちろん正解なんだけど

「・・・・愛紗にとって朱里は貧乳かはわわ軍師なんですか？」

「いや、その～・・・・勝手に口が」

勝手に口が動くくらいにそう思っていると言う事なのでは？

――― 地下

「・・・・・・よ～～く、ご主人様と空の趣味がわかりました。あっ！近くによらないでください。汚れる」

愛紗もお立ち台に居る奴隷に気付いて、その後に俺達を罵倒した

「・・・・潰すか。うん、潰そう。俺達の威厳の為にも」

まぁその後は蜀の1・2を争う二人が暴れたんだ。すぐに潰れた。でも問題はそれで解決しなかった

「あの！私達はこれからどうしたらいいのでしょうか？」

そう、元々この奴隷達は街で死にそうだったとかそんな人達がいきなり『もう貴方達は奴隷じゃないですよ』って言われてもどうしていいのかわからないよな

「どうする？見捨てるなんてできないんだろ？」

一刀や桃香はそう言う人だし

「・・・・・そうだ！なら侍女とかどう？月や詠が侍女の人数が足りないって言ってたし」

意外に簡単に決まった

その後は奴隷を城に連れ帰ってその日は終わった

ら、よかったのにね☆

「・・・・・・あぁぁぁぁ！！！ムラムラする！！」

サーセン、奴隷見てたらムラムラしちゃった☆ちなみに今は部屋に居ます

「オナなんて絶対にしたくない、つかそんなのじゃ納まんない」

誰かこのムラムラを止めてください！！！！

「・・・・行くか」

命を覚悟して愛紗の元え！

――――　愛紗の部屋前

「・・・我慢して、せめてキスくらいした」

そんな事を思い愛紗の部屋のドアをノックした

「ん？誰だ？入れ」

ガチャっとドアを開けて入ったら愛紗は髪止めを外していた

「・・・・よ！」

駄目だ、いろいろと緊張しすぎる

「・・・・何がしたいんだ？」

そうなるわな

「いや、その～・・・・・」

夜ばいしに来ました☆何て言えないし

「・・・・愛紗・・・はさ、俺の事。どう思ってんの？俺は前に言ったけど愛紗からは聞いた事なかったから」

俺がそう言うと愛紗が座ってた椅子から飛び上がり、部屋の隅まで行った

「なっ／／／／ほっホントに何が言いたいんだ！／／／／／」

真っ赤になりながら俺に対抗したいのかそう言った

「その、俺が愛紗に・・・す・・好きだって言った事はあるのに、愛紗からは聞いた事なかったから・・・・聞きたいんだ」

多分、今の俺も顔が赤いんだろうな

「／／／／／・・・・・その、私は。お前と初めて会った時の事をハッキリと覚えている。多分あの時の記憶は一生忘れない」

うん、嬉しいけど今はそんな事が聞きたいんじゃないの！

「と言うか。お前と一緒に居た時間で忘れたいと思った事はない。正直、お母さんやお父さんの記憶と空との記憶のどちらかを選べと言われたら。私はお前との記憶を取りたい」

愛紗・・・・・ん？

「・・・・嬉しよ。でもちゃんと言ってくんない？小難しい事言ってはぐらかそうとしてないか？」

そう言うとさっきまで目を合わせてたけど目を離された

「・・・・わかった。空・・・・・・・・・・あぁ～・・・・す／／・・すぅ～／／／」

多分此処で可愛いとか思うから最後まで聞けないんだろうな

俺は部屋の隅に居る愛紗の元にまで行って愛紗を抱きしめた

「ひゃ！／／／そっそら？／／／／」

慌ててておる慌ててておるｗｗ

「・・・言わないから悪い」

そう言って、初めて俺から愛紗にキスをした

「・・・・・まぁ、言ってもキスしたけど」

愛紗はボ～っとしていて俺の話しを聞いているのか聞いてないのかわからない

「・・・・急すぎるな、いつもお前は」

顔はまだ赤いけど、どこか嬉しそうな表情でそう言われた

「悪い？俺はそこを自分のチャームポイントとして売り出そうと思ったんだけど」

「・・・いいや、お前はそれくらいがちょうどいい」

愛紗は抱きしめている腕に少し力をいれて。俺の目を見て

「空、大好きだ。愛してさえいる・・・・・どうやら私はお前から離れられなくなってしまったようだしな」

今度は愛紗からキスをした。そんなやり取りがむしょうに嬉しくて、ただ離れたくなくなった

36話　奴隷市場と・・・悪魔（泣）（後書き）

空「／／／／／／／」

愛「／／／／／／／」

作者「・・・・・ねぇ、すっげーイライラするからやめてくんない！ねぇ！やめてくんない！」

空と愛紗が目が合うたびに顔を真っ赤にします。腹立つ

空「そ、そうだよな！次回予告はちゃんとしないとな！それではじきゃいよ・・・噛んだ」

愛「大丈夫か！？舌か？舌を噛んだのか！？」

空「大丈夫だよ・・・・いや、確かめてくれる？ホントに舌を噛んだか「天誅！！！！！」痛った！何すんだよ作者！」

作者「なんだよ！一発ヤっただけでリア充気取りですか！？はぁ！？殺しますよ☆」

空「わっわかったよ。次回、『曹操再び』じゃね」

愛「じゃ」

作者「次回予告がすっげー適当だった気がする」

37話　曹操が（前書き）

シリアス？です

最後らへんなんか「え？俺何書いてんの？」みたいな感じになりました。

最初に謝っときます

申し訳ございませんでした！！！！

37話　曹操が

突然ですが、愛って素晴らしいですね

そして愛って漢字が入ってる愛紗はもっと素晴らしいと思う

まぁ、何が言いたいかと言うと

ヤっちゃいました☆

「・・・ヤベーよ俺、段々と大人の階段上ってるよ。そしてさらば童貞。ありがとうチェリー」

あれだな、童貞であったから見える風景とヤった後の風景はサイコーだね

「しかし、童貞だった日々が懐かしいな。何でもないような事が幸せだったと思うみたいな？」

まぁ戻りたくないけど

「おっと、そろそろ軍義の時間じゃないか☆行くか！」

心が豊かになるってこう言う事を言うんだろうな

――――　軍義

「あの、空さん？大丈夫ですか？」

何だい雛里☆大丈夫ですかって

「俺はいつもこんな感じだったと思うよ☆それより早く軍義を始めようよ☆」

どうしよう、台詞から☆が離れないや。

「愛紗どうした？顔が赤いぞ？」

「ん！？あっいや、べっ別になにもない！気にするな！／／」

愛紗も初やつよの～、星の何気ない一言で顔真っ赤にしちゃってさ☆

「・・・フハハハハハｗｗｗｗヤベッｗｗ意味もなく楽しいｗｗｗ」

今なら誰にも負ける気がしない

――――　Ｓｉｄｅ　プレセア

なんでしょうか、今日はやけに空さんが明るい。いや、いつも五月蝿いくらいに明るいけどいつも以上に

「・・・・モモ、おかしいですよね。今日の空さん」

「・・・うん、愛紗さんも様子がおかしいし」

モモも異変に。というか今此処にいる皆さんが気付いていると思う

「ねぇ、まさかとは思うけど・・・・」

モモが何か思いついたようです

「愛紗さんと空さんがえっ・・・・Hな事をしたとか／／／／」

いえ、薄々気付いてはいたんですよ？ただ、腹立たしくて

「・・・殺るか・・・いや、さすがに・・・・・でも」

中にいる悪魔の自分は『奴を殺せ、血祭りだ！』と言っているが私の中の天使の自分が『待って！殺すのわいけないわ！責めて監禁して調教よ☆』どっちの自分も正しい事を言っているのに。

私にはどちらか何て決められない！

「・・・・・天使か天使か・・・・・じゃなくて天使か悪魔か」

悩みます

「プレセア☆どうしたそんな辛気臭いオーラだして☆」

空さんの回りを☆がグルグルと回ってる感覚に陥るくらいに今の空

さんはウザイ

「・・・・空さん、空さんは天使と悪魔。どちらがいいですか？」

私が決められないなら本人に聞けばいいんじゃないですか

「（天使？悪魔？・・・・そう言えば昨日の愛紗はまさしく天使だったな／／／）・・・天使！」

よかったです、私もそれがいいと思ってたんです

「そうですか、なら今日は寝る時にドアを開けたまま寝てくだしいね」

「（占いか何かか？）おっおう」

さっ準備をしないと

――― Ｓｉｄｅ　空

なんだろ、俺て会話した後にプレセアがどこかに行った。つか今一応、軍儀の最中なんだけど

「・・・・まぁいっか☆」

今の空さんは心が広いんだよ

「じゃあ朱里！軍義を始めちゃってください！！」

今の俺ならどんな無理難題を押し付けられても対応する自信がある！どれくらい今の俺が元気かを例えるなら水樹奈々のライブでしかも二日間の間ずっとライブとかで使うあの光る棒みたいなのを振りながらジャンプしていられるくらい元気だ。その後に田村ゆかりのライブも行けるぜ

「はい、じゃ・・・・・あっそうでした、曹操さんが攻めて来ました」

！！！！？？？？

今、俺は二つの意味で驚いた。一つ目は、曹操が攻めて来た事。まぁ原作と同じだね

二つ目は、朱里が曹操が攻めて来た事をサラッっと言った事だ。貴女特有の『はわわ』はどこにいった。いつもの朱里なら

『はわわわ！ごっご主人様！曹操がはわわ！攻めてきました！はわわ！あと空さん今日も素敵です！』

※この台詞はフェイクションです。とくに最後の部分

くらいの勢いなんだけど

「朱里！何でそんな曹操が攻めて来たのに落ち着いてんの！何か解決方法があるとか！」

「いえ、解決方法何て思い付きませんでした。ただ今日の空さん五月蝿いなぁ～とか思っていたら自然と落ち着いてきて」

・・・・・うん、軍師が落ち着いているのはいいことだ。それが自分を傷付けていたとしても

「・・・って！だからって落ち着いてる場合じゃないよ！曹操が攻めて来たんだよな？朱里」

「はい！ご主人様！はわわ！どうしましょうか」

俺は悟った、朱里は『はわわ』を使い分けていると。だって俺と話してる時は『はわわ』なんて一回も言わなかったのに。一刀と話し始めてから生き返ったみたいに元気になって『はわわ』を使いだしたんだもん

「・・・・・いいもん！いいもん！！お前達なんて母さんに言い付けてＰＴＡに訴えられればいいよ！！」

皆にそう怒鳴り付けて玉座を後にした

後、その日の夜に。プレセアの言う通りにドアを開けて寝ていたら。プレセアが入って来て、俺をどこかに連れて行こうとしたので全力で逃げました。ちなみにプレセアとの抗戦中に服が脱げ、半裸で城を逃げ回ってました

―――　次の日の朝

どうも皆様。今は曹操から逃げる為に城を捨てて逃げようとしてます

「じゃあ殿(しんがり)は鈴々と恋に「まつて一刀」なんだ？空」

「いや、殿は俺一人でやるよ」

皆が驚いた

「待ってって！空！殿は１番危険なんだぞ！？鈴々と恋に殿を頼むのもいい気はしないんだけど。だからって空がしなくても！しかもお前の部隊が１番人数が少ないんだぞ！？」

そう、実は兵を持っている数が蜀で１番少ない空なのです。３００人くらいかな？何で兵が少ないのかって？単に面倒臭いから３００人以上の兵は部隊に入れないようにしてます。ちなみに部隊名は『黒の騎士団』です。ルルーシュが好きでした

「ん～まぁ大丈夫？こう見えてつか見ての通り逃げ足は早いか。心配しなさんな」

そう俺が言うと一刀が渋々と言った感じで認めてくれた

「じゃあ、ほら！皆行った行った」

そして俺達は徐州を放棄し益州に向かった

「あぁ～、しかし早過ぎるよなぁ～。華琳が攻めて来るのはもう少し後だと思ってた」

殿をし始めて3日くらいたってそんな疑問が出てきた

「この前童貞を卒業したばっかりで少しくらい愛紗とイチャイチャしたい時期じゃん」

そして乳を満足するまでモミまくる！！なんて素敵な人生計画

「まぁ確かにバッコンバッコンしたよ？でもそれだけで満足する空さんじゃないんだよ。愛紗とデートしたいし。愛紗を抱き枕にして寝てみたいとか！モーニングコーヒーを裸Yシャツで入れてほしいとか！！」

愛紗ファンなら誰しもがやってみたい事を俺は全て行います！！愛紗にやってほしい事を大募集！・・・・嘘ですごめんなさい。そんな怖い事できません

「まぁその点を踏まえて！！華琳さんどう思いますか？」

はい！実はさっきから目の前に華琳の軍が居ます。凄い数です、オシッコちびりそう

「そうね、とりあえずその首ちょうだい？（はぁｔ」

最後の『（はぁｔ』は皆様が想像してるような可愛いやつじゃなくて。例えるなら悪魔の微笑み？

「待って下さい。確かにお惚気的な事を話た事については謝ります。だから首は勘弁」

貴女が首を切りなさいと命じたら貴女の後ろでイノシシの如く鼻息が荒い春蘭が襲い掛かってくる。エロくない意味で

「華琳さまぁ～、早く空の首を！首を切りたい切りたい！」

そんな『お母さん！柿ピー買って！買って買って！』みたいな感じに言わないでください。人の命は柿ピーより高いんだよ？

「・・・・あっ、副ヘッド」

副ヘッドとは『黒の騎士団』の副リーダーの事です。ちなみに俺はヘッドと皆に言わせています。スマギャンが好きなんです。詳しく言えば水樹奈々が大好きなんです

「何ですかヘッド。というかこの数を我々だけで引き止めるのですか？」

まぁ心配になるわな。こっちの数は３００で向こうはその何十倍も兵が居るんだから

「いや、いいよ。お前らは一刀達が居る所に戻っといで。後はこのヘッドがなんとするから」

「なっ！そんな無茶な！・・・・・・わかりましたヘッドに従います。シャッス！！」

何かを感じとってくれたのか副ヘッドは兵を引き連れて退却し始め

た。ちなみにシャッス！とはイエッサー！的なノリで言わせてます

「あら、いいの？雀の涙ほどの兵とは言え返してしまって」

事実だけど酷くね！？

「まぁ・・・・カッコ付けみたいな？此処は任せて先に行け！みたいなさ。それに華琳とはお話ししないといけない事があるし」

「えぇ、私もあるの。空？貴方いつになったら私に話た事を実行してくれるのかしら？私は余り気が長くない方なの」

知ってます。全国のユーザー皆様が知ってます

「・・・正直、愛紗って言う大切に思う人がつか前から大切だったんだけど前以上に愛紗の事を大切に思うようになったんだ」

「なら私と話した事は嘘なの？」

「いや、だからこそ・・・・・・・・・・

・・・・俺は魏に行く」

俺がそう言うと俺の後ろから武器が落ちる音がした

「はぁ～・・・ホントにナイスタイミングだよね。愛紗って」

やっぱり後ろに居たのは愛紗だった。

「・・・え？・・・・・ど・・・どうし・・・て・・・」

声が振るえてる。ホントに信じられないって言う感じだ

「空、私からも聞いて言いかしら？関羽の事を大切に思っているなら何故？私の元に降るの。」

「まず、俺は華琳の部下になるつもりはない。あくまで客将って形で華琳の元に行く。だって俺は桃香や一刀達が好きだから」

「なら何でだ！！答えろ！！！」

愛紗が俺につかみ掛かりながらそう怒鳴った

「・・・桃香の考えは好きだよ？皆を助けるって凄いじゃん。でもやり方が駄目だと思うんだ。後々の話なんだけど。桃香はこのままいけば天下を取るよ。三国皆が協力した結果で」

「なら・・・・なおさら意味がわからない」

愛紗はまだ俺につかみ掛かったまま。涙を流していた

「桃香が天下を取った意味ってさ。後々だけど愛紗達の蜀と呉と魏

の三つの勢力に別れるんだ。そしてこの三国が闘いを始めて、少し経ったくらいにもう一つの巨大勢力が出て来て。そこで三国の代表が戦闘中だったけど話し合った結果。この三国が力を合わせてその巨大勢力に勝つんだよ」

「でもそれってさ？逆に言えばその巨大勢力が出て来なかったら三国が争いを続けていずれは一つの勢力が天下を納めるだよ。桃香の考えとは掛け離れてる。結局潰し合ってるだ。それは・・・・皆が笑顔で暮らせる世界とは違うよね？」

そう俺が言うと愛紗は掴んでいた手を離した。顔は下を向いていて表情が見えない

「・・・・空はそんな事、興味なかったじゃないのか？お前は私が平和な世界を目指していたから仕方なく手伝っているだけだと思っていた」

あれ？今度は罵倒ですか？

「まぁ～、最初はな？でも真剣な愛紗見てると俺も本気で平和な世界を目指してみたいと思ったんだ。前にも言っただろ？聞いてたか知らないけど。『愛紗が本気で世界変えたいと思ってるから俺も本気でその願いを叶えようと思ってんの』って。そして俺が魏に行く選択をしたのは本気で考えた結果そうなった」

今の俺を『私は郭銀　元です！！』って言える自信ないな

「・・・・・やだ・・・・やだ！！離れたくない！もう空が居なくなるのは嫌だ・・」

愛紗が俺に抱き着いてきた。

「・・・・あぁ！クソ！！」

俺は自分の右目に手をやると右目をえぐり出し。握り潰した

「なっ！！空！何をしてるんだ！！」

愛紗が俺の目から出ている血も気にせず。自分の手で俺の右目の部分を抑えた

「だって涙だ出そうだったから」

「馬鹿かお前は！！泣けばいいじゃないか！？私が受け止めてやるか「それじゃダメなんだよ」何でだ？」

「今から愛紗を裏切るってのに・・・・裏切ってる自分が泣いてたらダメだろ？1番辛いのはお前なのに」

俺は愛紗から離れると華琳の元に向かった

「・・・・・・・空・・」

愛紗はそれだけ言うと地面に座り込んで感情の無い人形みたいに動かなくなった

「・・・・空？貴方ホントにいいの？」

華琳が桃香を追うのを辞めて。今は自分達の陣地に戻ってます

「え〝なにが？べづに俺はべいぎだじ」

「なら顔の涙を流すのを辞めて。あと右目からの血が冗談抜きで危ないわよ」

だって！！愛紗と甘い日々に入ると思った矢先にこれだもん！！もっと愛紗の乳揉みたかった！！魏って貧乳率高いもん！！

「・・・・・空？・・・・これ、使え」

春蘭が自分の予備？かわからないけど眼帯を貸してくれた

「・・ありがど・・・・・・・・」

黙って春蘭の眼帯を付けた・・・・・エへへ！なんだろ、フィットする！

「・・・・・アハハハハハWWWWW・・・・あいじゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

始めにテンションを上げといて。・・・・・・・思いっきり泣いた

３７話　曹操が（後書き）

空「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！乳がぁぁぁあ！！愛紗がぁぁぁぁ！！」

華琳「・・・・五月蝿い」

空「・・・・・グス」

華琳「しかし貴方、いつもこんな次回予告？何てしているの？」

空「まぁ、この前は愛紗と次回予告を・・・・愛紗と・・・・・ぶぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！愛紗ぁぁぁぁぁぁあ！！」

華琳「五月蝿い・・・・じゃあ私がやるわよ？次回予告。空が蜀を裏切ったその頃本陣は何を？」

空「自害・・・まぢがいだ、次回。『・・・俺、最低だ』・・・・・

華琳さん。オッパイ揉ませ・・・・無かったんだよね」

華琳「ちゃんとあるわよ！！控えめなだけ！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8210m/

幼なじみが関羽さん 2

2010年10月12日10時06分発行